

プラトン『テアイテトス』における認識と価値

課題番号 17520009

平成17年度－平成19年度科学研究費補助金
(基盤研究(C)) 研究成果報告書

平成20年3月

研究代表者 今泉 智之
(三重大学人文学部准教授)

はしがき

本冊子は、平成 17 年度－平成 19 年度に交付された科学研究費補助金（基盤研究(C)）による研究「プラトン『テアイテトス』における認識と価値」の研究成果報告書である。

『テアイテトス』は、「知とは何か」を主題にした認識論の古典的著作である。本研究ではその議論を、美醜善悪などの価値の認識はどのようになされるかということも視野に入れながら、検討した。『テアイテトス』においては、知覚 (aisthēsis)、判断 (doxa)、判別 (krisis)、思考 (dianoia)、考察 (skepsis)、知 (epistēmē) などの認識能力が取り上げられている。しかし、これらの能力が認識を行う際それぞれどのような役割を果たすのかについては、いまだに研究者の間で論争が続けられているというのが実状である。本研究では、先行の諸研究を『テアイテトス』のテキストと照らし合わせながら整理、検討したうえで、プラトンは『テアイテトス』において、価値の認識を含めて、どのような認識論を打ち立てているのかを明らかにすることを試みた。

主な研究成果は三つある。まず『テアイテトス』の中程に現れる、「神に似ること」という考え方が語られる議論の位置づけを明らかにした。その議論については、これまで、『テアイテトス』の本題とは無関係である、あるいはそこに描かれている哲学者のあり方はプラトン本来のものではない、などと解釈されることがしばしばあった。しかしその議論において思考、考察などの語は、『テアイテトス』の他の箇所と同様、知覚よりも上位にあり、また美醜善悪などの認識に関わるものとして用いられている。したがって、こうした従来の解釈には疑問の余地があり、その議論は『テアイテトス』において重要な役割を果たしていることを示した（『テアイテトス』における「神に似ること」の射程）。次にそれを踏まえて、「神に似ること」が語られる議論の内容は、『ソクラテスの弁明』『国家』『饗宴』など、プラトンの他の著作で示されている考え方との関連でどのような意義をもつのかを、人間と神の対比という視点から検討した（「人間の有限性と神——プラトンに即して——」）。さらに、『テアイテトス』に関して知覚の能力と思考・考察などの働きを厳密には区別せず、知覚にも思考・考察の働きを認める解釈はテキスト上の論拠に乏しく、『テアイテトス』解釈としては知覚と思考・考察は区別しなければならないということを明らかにした（『テアイテトス』（184-186）における知覚と思考）。本報告書には、研究成果として以上の三本の論文を収録した。収録に際しては、必要に応じて加筆、修正を施したことをことわっておきたい。

なお、本研究費の助成を受ける前年度に発表した論文「『テアイテトス』（186c4）における「教育」の一解釈」（『人文論叢』第 22 号（三重大学人文学部文化学科）、2005 年 3 月、49-64 頁）も、本研究に密接に関連するため、本報告書にあわせて収録することにした。

平成 20 年 3 月
研究代表者 今泉 智之

【研究組織】

研究代表者 今泉 智之（三重大学・人文学部・准教授）

【交付決定額（配分額）】

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 17 年度	600,000 円	0 円	600,000 円
平成 18 年度	500,000 円	0 円	500,000 円
平成 19 年度	500,000 円	150,000 円	650,000 円
総計	1,600,000 円	150,000 円	1,750,000 円

【研究発表】

〔論文〕

今泉智之「『テアイテトス』における「神に似ること」の射程」、『論集』第 12 号（三重大学人文学部哲学・思想学系、教育学部哲学・倫理学教室）2006 年 1 月、71-86 頁。

今泉智之「人間の有限性と神——プラトンに即して——」、遠山敦編『有限と無限』（三重大学出版会）2006 年 3 月、67-79 頁。

今泉智之「『テアイテトス』（184-186）における知覚と思考」、『人文論叢』第 25 号（三重大学人文学部文化学科）2008 年 3 月刊行予定。

目次

『テアイテトス』における「神に似ること」の射程……………	2
人間の有限性と神 ——プラトンに即して——……………	13
『テアイテトス』(184-186)における知覚と思考……………	21
『テアイテトス』(186c4)における「教育」の一解釈……………	32

『テアイテトス』における「神に似ること」の射程

今泉 智之

『テアイテトス』の第一部は「知 (epistēmē) は知覚 (aisthēsis) にほかならない」というテアイテトスによる定義を批判している。その第一部の中程 (172c-177c) には、比較的長い一続きの議論がある。そこには「神に似ること (homoiōsis theō[i])」という考え方が現れているが、これまでこの議論の内容は、『テアイテトス』第一部のなかで積極的な意味をもたないと見られることも多かった。しかしそうした見方ははたして正しいのであろうか。本稿では、テアイテトスの定義に対する批判との連関で 172c-177c の議論が果たしている役割を検討しながら、「神に似ること」という考え方にはどのような意義があるのかを考察したい。

1

『テアイテトス』において「神に似ること」という考え方が述べられる 172c-177c の議論は、哲学者と対比させながら弁論家の生き方を批判するものである。まずそれがおよそどのようなものなのかを、四つに分けて簡単に確認しておきたい。

A 172c3-173c6

知恵 (sophia) を愛すること、すなわち哲学に時間をかけて養育された人は、自由に時間の余裕 (scholē) をもって言論を行うが、他方弁論家は、裁判所では水時計が促すので、奴隷のように、常にせわしなく (en ascholia[i]) 語る。そのため、弁論家の魂は狭小で正しくないものになって、思考 (dianoia) の健全さもなくなるが、自分では有力者、知者になったと思っている。

B 173c7-174b8

哲学者は弁論家と異なり、アゴラへの道や、裁判所や議会などがどこにあるのかなどは知らない。哲学者の思考はこれらすべてを無価値と見なし、むしろ地上では幾何学を、天上では天文学を研究し、あらゆる仕方で存在するものの全体について、それぞれその本性 (physis) すべてを探求する。タレスが天文学を研究しようと上方を眺めていて井戸に落ちたとき、トラキアの侍女が、天上のことを知ろうとはするが、自分の面前や足下のことは気づかない、と冷やかした。同じ非難は、哲学にときを過ごしている人すべてにあてはまる。なぜなら哲学者は隣人が何をしているかだけでなく、隣人が人間なのか、それとも何か別の動物なのかどうかもほとんど気づかないからである。むしろ哲学者は、人間とは何であるのか、また何をしたりされたりするのが人間の本性にふさわしく、人間以外のものには備わっていないことなのか、ということを探求し、追求しようと苦勞している。

C 174b9-176a4

さらに哲学者が裁判所などで足下や目前のことについて問答 (dialegethai) をしなければなくなると、無経験のために井戸に落ちたり行き詰まったりして、トラキア女だけでなく、大衆からも笑われる。また人の賞賛や自慢ということになると、哲学者はおかしがる振りをするのではなく本当に笑うので、愚か者だと思われたりする。すなわち哲学者は、世俗の僭主や王が賞賛されているのは、豚飼、羊飼、牛飼などの牧童が家畜をたくさん搾取しているから幸福だと聞かされるようなものだと考える。また哲学者は、そうした僭主や王は、時間の余裕がないために (hypo ascholias)、必ずこうした牧童に劣らず野蛮で無教育 (apaideutos) だと見なしている。このように、哲学者は一方で高慢な態度をとりながら、他方足下のこともわからずに行き詰まったりするので、多くの人に笑われるのである。しかし逆に、哲学者が大衆を上方に引き上げて、正と不正そのものについて、それぞれはいったい何であるか、両者はいかなる点でそれ以外のすべてのものと、また互いに異なっているのか、そして王であることとは、また人間の幸福と不幸とはどのようなものであり、どのようにして幸福を得、不幸を避けるのが人間の本性にはふさわしいのか、これらのことの考察 (skepsis) へ向かわせると、今度は大衆の方が不慣れのために悩み、行き詰まって、トラキアの女や他の無教育の人には笑われないが、そうした奴隷育ちではないすべての人の笑いものになる。

D 176a5-177c5

善には常に悪がついて回り、悪がこの世界にあるのは必然である。そこで、この世界からかの地へできるだけ早く逃げなければならない。それができる限り神に似ること (homoiōsis theō[i]) であり、思慮 (phronēsis) を伴って正しく、敬虔になることにほかならない。悪 (ponēria) を避け、善さ・徳 (aretē) を求めなければならないのは、悪しき人ではなく善き人だと「思われる」ため、などではない。むしろ、神は最高に正しいものであり、神に似るにはこの上なく正しくなるほかはないからである。それを知ること (gnōsis) が知恵 (sophia) であり、真の徳である。他方それを知らないこと (agnoia) が無知 (amathia) であり、明白な悪である。そして不正なことや不敬虔なことを行う人は、自分を無能だと思っていないというその分だけいっそう無能、無知である。なぜならそのような人は不正の罰を知らないからである。その罰とは、愚かさや極度の無知のために、不正な行為によって神ならぬもの (atheon) には似るが、神には似ないということであり、それがもっとも不幸なことである。

問題の「神に似ること」という文言は、Dに現れている。はじめに述べたように、全体としてこの議論は、弁論家批判を主な内容としているとすることができる。まずAでは、時間に余裕をもって自由に知恵を求める哲学者と、奴隷のように常にせわしなくしている弁論家の生き方が対比される。Bでは知恵を愛し、学にいそしむ哲学者のあり方が述べられる。続くCでは世俗における哲学者の生き方がさらに説明された後、哲学者と大衆や弁論家の立場の逆転が描かれる。最後のDで、知恵を愛し、善さ・徳を求める哲学者の姿勢が「神に似ること」と言い表され、それとは逆の生き方が「神ならぬものに似る」と

して批判されている。

さて、はじめに述べたようにこの議論は、『テアイテトス』のなかで積極的な役割を果たしていないと見られることも多かった。すなわち、この議論は「知とは何か」を検討する『テアイテトス』の本題とは関係がないと考えたり⁽¹⁾、あるいはここで描かれている哲学者像は戯画にすぎないと見なす人もいるのである⁽²⁾。この箇所冒頭(172d6)においてソクラテスが、これで議論の脱線は三度目だと述べていること(cf.160e,168c)、また、この議論の終わりに、以上に述べられたのは「付随的なこと(parerga)」だと言っていることは(177b8)、こうした見方を支持しているかのようにも見える。しかしこのように理解すると、この議論の意義を見失うことになる恐れがあると思われるのである。この議論がとくに深く関連していると考えられるのは、『テアイテトス』第一部におけるプロタゴラス批判である。そこでまず、『テアイテトス』が提出した知の第一の定義がプロタゴラスの主張とどのように関わっているのかを確認しておきたい。

『テアイテトス』第一部では、テアイテトスの「知は知覚にほかならない」(151e2-3)という第一の定義がプロタゴラスのいわゆる人間尺度説と結びつけられる。尺度説とは次のようなものである。

万物の尺度は人間である、〈ある〉ものについては〈ある〉ということの、〈あらぬ〉ものについては〈あらぬ〉ということの(152a2-4)。

これは次のように言い換えられる。

それぞれのものが私に現れているちょうどその通りに、それらは私にとって〈ある〉、他方それぞれのものが君に現れているちょうどその通りに、それらは君にとって〈ある〉(152a6-8)。

この「現れている(phainetai)」は「知覚している(aisthanetai)」と置き換えられて(152b12)、次のように定式化される。

各人が知覚しているものは、その通りに各人にとっておそらく〈ある〉(152c2-3)。

この定式は、知覚が知であるための条件、すなわち、常に〈ある〉に関わる、誤らない、という二つの条件を満たしていることを示唆している(152c5-6)。たとえば、風をある人が冷たいと感ずれば、その風はその人にとっては冷たいものとして〈ある〉から、その知覚は誤りではなく、したがってそれは知にほかならないことになるのである(cf.152b2-8)。このようにして、テアイテトスの第一の定義はプロタゴラスの尺度説と連関していることが示されるが、『テアイテトス』第一部ではそれが様々な角度から批判されることになる。そして問題の172c-177cの議論はそうした批判と深いつながりをもっており、その点で「知とは何か」を追求する『テアイテトス』の本題と少なからず関連していると考えられるのである。以下ではそれを、『テアイテトス』第一部の議論の内容を考慮しながら、人間と神の違い、用語の問題、時間の余裕の三点から論じる。あわせて「神に似ること」がどの

ようなことを含意しているかを考えたい。

2

まず注意する必要があるのは、テアイテトスの「知は知覚にほかならない」という第一の定義と結びつくと言われているプロタゴラスの人間尺度説は、動物、人間、神の三者を類同化する面をもっているということである。すなわち知覚が知であるとするならば、知覚することは動物にも可能なので、知に関して人間と動物の区別がなくなることにつながる。同時にその立場は、神と人間の違いを無に帰することにもなる可能性があるのである。そのことをソクラテスは次のように説明している。

私は議論の始まりで、すなわち、プロタゴラスが『真理』という書物を始めるにあたって、大げさに、またひどく軽蔑した仕方で語り始めるために「万物の尺度はブタである」とか「ヒビである」とは言わなかったこと、あるいは知覚の能力をもつ何か他のもっと奇妙なものを挙げなかったのを不思議に思う。そうしていればプロタゴラスは次のことを示すことになったはずなのだ、すなわち、知恵 (sophia) についてわれわれはあたかも神であるかのようにプロタゴラスに驚嘆しているが、実際は思慮 (phronēsis) に関してカエルの子のオタマジャクシよりも彼のほうが優れている、ということは決してないし、ましてや誰か他の人間と比べた場合は言うまでもない、ということ。…というの、もし知覚を通して判断するもの (ho an di' aisthēseōs doxazē[i]) が各人にとって真であり、ある人の知覚経験 (pathos) について別の人のほうが優れた仕方で判別する (diakrinei) とか、ある人の判断 (doxa) が正しいか誤っているかの考察 (episkepsasthai) に関しては別の人のほうが力がある、ということはないのであり、むしろ…各人は自分だけで判断をし (doxasei)、その判断したものはすべて正しく、また真であるのだとしてみよう。その場合、なぜプロタゴラスは知者 (sophos) であり、そのため他の人の教師として多額の報酬を得るに値すると見なすのが正しいことになるのか、他方、各人自身が自分の知恵の尺度であるのに、われわれが彼より知恵がなく、彼のもとを訪ねなければならなかったのはなぜなのであろうか (161c3-e3)。

ここでは、プロタゴラスの尺度説の立場に立つと、プロタゴラスが金銭との引き換えで教育を行っていたことが無意味になる、と批判されている。プロタゴラスは当代きってのソフィストであり、自ら知恵をもっていると称して、人々に、どうすれば優れた人、すなわち徳がある人になれるかを、金銭と引き換えに教えていた。その教育の内容が、弁論家になるために不可欠な技術、すなわち弁論術にほかならない。弁論術は「裁判所で裁判官を、議会で議員を、民会でその出席者を、また市民が集まって行われる他のあらゆる集会で、言論によって説得する能力」(『ゴルギアス』452e) と規定されている。すなわちこうした公の場で多くの人々を説得することができれば、やがては「国家有数の人物」になれると信じて(『プロタゴラス』316b-c)、人々は彼の教えを受けていた。その教育の結果プロタゴラスが稼いだ額は、フェイディアスなど当時の名高い彫刻家の収入をも上回っていたと伝えられている(『メノン』91d)。

しかし、そのように人に教育を施す際には、教育を行う側とそれを受ける側との間に、知恵や思慮に関して前者は後者より優れているという関係が成立していなければならない。すなわちプロタゴラスが人を教えるためには、プロタゴラスは教育を行う相手より知恵がある必要がある。しかし、もしテアイテトスの言うように知覚が知であるとすれば、知覚の能力はプロタゴラス以外の人間にも備わっているので、プロタゴラスが自分以外の人間を教育する必要はなくなる。すると、プロタゴラスが他の人に教育を施して金銭を受け取っていたことが不合理になる。それどころか、人間以外の動物にも知覚を行うことは可能なので、人間と動物の間にも知恵の優劣がなくなることになってしまうというのである。

「知は知覚にほかならない」という定義がこのように知恵 (sophia) もしくは思慮 (phronēsis) と関連させて批判されるのは、この議論に先立って、知と知恵は同じものだと言われていたことによると考えられる (145e1-7)。そしてここで重要なのは、知恵をもつことがさらに神と結びつけて考えられているということである。引用のなかの「知恵に関してわれわれは、あたかも神であるかのように (hōsper theon) プロタゴラスに驚嘆している」という言い方がそれを示している。しかし、知恵と知が同じものであり、知覚が知であるとすれば、人間と動物の間だけでなく、人間と神の間にも知恵に関して優劣がなくなることになるので、プロタゴラスを知者として、あたかも神のように崇拜し、その教育を受けることが不合理になる。このように、テアイテトスの定義との連関で引き合いに出されたプロタゴラスの尺度説は、知恵に関してそれぞれの人間、また人間と動物、さらには人間と神の間の違いを類同化することになり、それはプロタゴラス自身が教育を行っていたことと矛盾するということを指摘することで、批判されているのである。

これは逆に言えば、プラトンにあっては、知もしくは知恵・思慮に関して動物、人間、神の三者は区別されなければならないということを意味している。そしてこの点は、当該の議論Dで「神に似ること」が「思慮 (phronēsis) を伴って正しく、敬虔になること」として捉えられていることと関連すると思われる。というのは、そこでは神と人間の違いが前提されていると考えられるからである。人間は神に比べれば劣った存在であるからこそ、正しい生き方をすること、すなわち「思慮を伴って正しく、敬虔になること」が「神に似ること」と見なされている。そうだとすればその議論は、動物、人間、神の三者を等し並みに扱うことになるプロタゴラスの尺度説を批判する先の議論と通底するものをもっていると言うことができよう。

さて、次に見ておかなければならないのは、当該の議論 172c-177c の用語である。というのは、丁寧にたどるとこの議論の用語は、『テアイテトス』の他の議論の言葉遣いとよく一致していることがわかるからである。見られたようにこの議論のB、Cでは、「思考 (dianoia)」(173b1,e3)、「考察 (skepsis)」(175c2,6) などの認識のあり方が挙げられている。まずこのうちCにおける「考察」は、先に引用したプロタゴラスを批判する議論 161c3-e3 で「知覚を通じた判断」の正誤を見きわめるとされていた「考察する (episkepsasthai)」という動詞と同根の語である。そこでその働きは、明らかに知覚より何か上位のものとして捉えられているが、その直後の 161e6-8 では、哲学者の営みである問答が、その「考察」という語を用いて「互いの現れや判断を考察し、吟味しようとする」と規定されている。すなわちそこでは、知覚より上位の働きである「考察」が哲学者の行う問答と密接に

結びつくものと考えられている。他方当該の議論Cにおける「考察」という語も、哲学者が行う認識の営みとの連関で用いられているのである。この点で、当該の議論とこの161c-eにおける「考察」という語の用法には共通性があると言えるであろう。

加えて、この「思考」「考察」などの語は、テアイテトスの「知は知覚にほかならない」という定義が最終的に論駁される184b-186eにおいても用いられている。そこでは思考、考察などの働きは〈ある〉を捉えるのに対して、知覚は〈ある〉を捉えられない以上〈真理〉も把握せず、それゆえ知には与らないと言われている。その議論で思考、考察は、色と音の〈ある〉〈あらぬ〉や、その二つが互いには〈異なる〉が、自分とは〈同じ〉であり、双方では〈二〉だが、それぞれは〈一〉であるということ、またその双方は互いに〈似ている〉か〈似ていない〉か、などのことを見きわめる働きと規定されている(185a4-b6)。これは、他方当該の議論Cにおける「正と不正そのものについて、それぞれはいったい何であるか、両者はいかなる点でそれ以外のすべてのものと、また互いに異なっているのか、そして王であることとは、また人間の幸福と不幸とはどのようなものであり、どのようにして幸福を得、不幸を避けるのが人間の本性にはふさわしいのか、これらのことの考察」という言い方に近いと考えられる。先に述べたようにこれは、弁論家や大衆には欠けていて、それと対比される哲学者に帰属する認識のあり方であるが、内容的にそれは、184b-186eにおいて思考、考察などが色や音を上述のように分節化して把握すると説明されているのを素朴な形で先取りしたものと見ることができると思われる。そうだとすればこの点でも、当該の議論172c-177cの用語は、『テアイテトス』の他の議論における用法と重なり合っていることになる。

以上のように、神は人間よりも優れた存在と見なされている、また用語が類似しているという二つの点で、当該の議論は『テアイテトス』の他の議論と連関していると考えられる。ここではさらに、〈ある〉などの把握に関わるこうした思考、考察などの認識能力がどのように獲得されるかということに関して、それらは同じく184b-186eの議論のなかで「かろうじて長い時間をかけて多くの苦勞と教育を通して」(186c3-4)人間に備わることもある、と述べられていることに注意する必要がある。というのは、当該の議論Aでは、哲学に時間をかけて養育された人は、自由に時間の余裕(scholē)をもって言論を行い、それが知恵(sophia)を追い求める哲学者のあり方だとされているからである。すでに見たように184b-186eにおいては、〈ある〉という語は〈真理〉と密接につながっており、その〈ある〉を捉える能力をもつことが、その人に知(epistēmē)が備わることに結びつけられていた。そして先にふれたように、知恵は『テアイテトス』の冒頭において知と同じものだと言われていたのである。そうだとすれば、当該の議論Aと184b-186eは、哲学者の行う知恵もしくは知を求める探求には長い時間が必要であることを等しく示唆しているという点で、通底していることになる。逆に議論Aでは、せわしなく(en ascholia[i])言論を行う弁論家の魂は狭小で正しくないものになり、思考の健全さもなくなると言われ、Cでは、世俗の僭主や王は、時間の余裕がないために(hypo ascholia[s])野蛮で無教育(apaideutos)であることが指摘されている。これは、知を求める哲学の営み、あるいは真の意味の教育には長い時間が必要とされることの裏返しであると考えられる。

この点について付言すれば、184b-186eの議論においては、知覚することは生まれたばかりの人間や動物にも可能であると言われている(186b11-c2)。このことと対比させる形

で、〈ある〉を捉える働きを獲得するには「かろうじて長い時間をかけて多くの苦勞と教育」が必要と述べられているのである。すなわち〈ある〉を捉える能力をもつ可能性があることが、幼児や動物と成長した人間とを区別する規準にもなっており、先に引用した161c-eにおいても示されているように、それが『テアイテトス』の第一部で明らかにされている考え方の一つであると見ることができる。

3

以上において、「神に似ること」という考え方が述べられる当該の議論172c-177cが『テアイテトス』の他の箇所とどのようにに関連しているかを、主に人間と神の違い、用語の問題、時間の余裕の三つの論点に着目して検討してきた。これまでの考察が正しければ、この議論は『テアイテトス』の本題とは関係がないとか、あるいはここで描かれている哲学者像は戯画にすぎない、と言い切ることができるかどうかは難しいということになるように思われる。少なくともこの三つの点において、この議論は『テアイテトス』の他の箇所と親近性を持ち、その主題である知をどう捉えるかという問題に深く関わっていると考えられるからである。すでに見たように、当該の議論の末尾において、この議論は「付随的なこと」だと言われていたが、まさにそのなかで、自由に時間の余裕をもって探求を進めることが哲学者の本来の営みだということが示唆されていた。そうだとすれば、「付随的なこと」として述べられたこの議論の内容も、本篇の主題である「知とは何か」を追求することに貢献しているとも考えられる。

では「神に似ること」という考え方が示されているこの議論の内容には、思想的にはどのような意義があるのであろうか。

見られたように『テアイテトス』において、人間は他の動物とは異なり、思考、考察などの働きを備えることができると考えられている。すなわち、知覚することはブタ、ヒヒ、オタマジャクシなどの動物にもできるが、他方知覚の真偽、正誤を判定し、対象を〈同じ〉、〈異なる〉などと分節化して把握する思考、考察などの認識は人間に「かろうじて長い時間をかけて多くの苦勞と教育を通して」備わる可能性がある。言い換えれば、そうした可能性があるということが、人間を他の動物から区別する徴表となっている。この点ではまず、当該の議論Cにおいて「正と不正そのものについて、それぞれはいったい何であるか、両者はいかなる点でそれ以外のすべてのものと、また互いに異なっているのか、そして王であることとは、また人間の幸福と不幸とはどのようなものであり、どのようにして幸福を得、不幸を避けるのが人間の本性にはふさわしいのか、これらのことの考察」という言い方がされていることにあらためて注意する必要がある。すなわちそこで「考察」という働きは、人間にとっての正・不正、幸・不幸などを分別する役割も担っていると見なされている。すなわち、知覚をとおしての認識の正誤、真偽を判定し、さらには正・不正、幸・不幸を分別するこうした「考察」などの働きは人間に固有のものであり、その限りで人間とそれ以外の動物を区別するしるしとなりうるものであると考えられる。ここで重要なのは、それが正・不正、幸福・不幸など倫理的な事柄に関連づけられているということである。

このことは、前節でもふれた「知は知覚にほかならない」という定義が最終的に論駁さ

れる『テアイテトス』第一部の末尾(184b-186e)の議論においてより明確になっている。そこでは、音と色は異なる、硬さと柔らかさは反対などのことを認識する思考、考察などの働きは、加えて、美・醜、善・悪などの事柄の把握にも関わるとされているからである(186a9-c6)。獲得するために長い時間と労力が必要なこれらの働きは、このように正・不正、幸・不幸、美・醜、善・悪などの倫理的な事柄の認識に携わるものでもある。そしてこのように述べる時おそらくプラトンは、プロタゴラスが金銭と引き換えに、いわば短期間に弁論術を教え、それによって人のあり方を優れたものにする公言していたことを批判する意図を込めている。

くり返し述べてきたように、『テアイテトス』の議論によれば、動物も知覚を行うことはできるが、しかし、思考、考察などの働きはもっていない。正・不正、幸・不幸、美・醜、善・悪などの把握に関わるのが後者だということは、それを備えていない動物はこれらの事柄について考えることができないということにほかならない。これは、人間以外の動物は、倫理的な意味で自分のあり方を優れたものにするには不可能だということを意味している。これらの事柄について考察することは、自分のあり方を優れたものにするためには不可欠と考えられるからである。逆に言えば、こうした事柄について考えをめぐらし、それにもとづいて自分のあり方を優れたものにするということが、他の動物には見られない人間の特性なのである。

ただしこの場合「優れている」ということは、人々がソフィストの教育に期待したような「国家有数の人物」になることとは必ずしも結びつくものではないことに注意する必要がある。プラトンによれば、人間の善・悪が問題になるときにまず第一に考えなければならないのは、「国家有数の人物」になることなどではなく、その人の心・魂(psychē)のあり方である。そのことは、魂こそが人間にとって「すべての幸・不幸がそこに関わってくるもの」(『プロタゴラス』313a)という言い方で示されている。また、かりに「国家有数の人物」になることができ、その結果名誉、金銭などが手に入ったとしても、そうしたものの自体は本来価値をもつものではないとプラトンは考えていた。そうした名誉、金銭などに価値が生まれるのは、それを所有している人の魂が優れたものになったときである(『ソクラテスの弁明』30a-b)。

ところで、そうした正・不正、幸・不幸、美・醜、善・悪などの認識に関わる思考、考察などの能力を備えることができ、それによって自らを、すなわち自分の魂のあり方を優れたものにする可能性をもっている人間も、神よりは劣った存在である。すでに述べたように、この議論で「神に似ること」が語られるとき、神と人間の違いが前提されている。人間は神に比べれば劣っているからこそ、より優れたものになることが「神に似ること」と言い表されているのである。そして、おそらく神だけが本来の意味での知や知恵をもつものと考えられる。もっとも、人間も知や知恵にまったく無縁というわけではない。しかし人間に可能な知恵は、当該の議論Dの言葉を用いるならば、せいぜい「神は最高に正しいものであり、神に似るにはできるだけ正しくなるほかはない」ということを知ることにすぎない。

この点と関連すると思われるのが、『ソクラテスの弁明』で示されている考え方である。そこでソクラテスはよく知られているように、自分は「善美なること(kalon kagathon)」は知らず(21d4-6)、実際は神が知者(sophos)なのかもしれないと述べている(23a5-6)。

ソクラテスによれば、人間に許されているのは「人間並みの知恵 (anthrōpinē sophia)」(20d8,23a6-7) にすぎない。それは、自分は本当は知恵に関しては何の価値もないということを知ることである (23b3-4)。ソクラテスは「不正を働くこと、神でも人でも優れたものにしがわれないことは悪であり醜であると知っている」(29b6-7) と述べているが、何が正しいことであるかを知っているとは言っていない。しかし他方この上なく優れたものの、思慮あるもの (hōs beltistos kai phronimōtatos) となるようにと主張している (36c5-7)。ソクラテスは、善美なること、あるいは正しさに関しての無知を自覚した上で、その知もしくは思慮についても最大限に努力するよう促しているのである。

また、『饗宴』(203b-204c) でエロス (愛) について説明される箇所では、およそ次のように言われている。すなわちエロスはポロス (富) を父とし、ペニア (貧困) を母として生まれた。そのため、常に貧しくはないが、かといっていつも裕福なわけでもない。これは知に関しても同様であり、エロスは知と無知の中間に位置している。神々は、現に知者であるから、知を愛することはないし、知者となることを求めたりもしない。しかし他方、無知な人も知を愛したりはせず、知者となることを求めてもいない。すなわちまさにこの点が無知の厄介なところであり、自分が実際は優れている (kalon kagathon) こともなく、また思慮がある (phronimon) わけでもないのに、自分では不足がないと思っている。自分に不足があると思わない人は、自分に欠けているとは思っていないものを望んだりもしないのである。ところで知は最も美しいものに属し、エロスとは美しいものに対する愛であるから、エロスが知を愛するものであり、知を愛するものが知あるものと無知なるものの中にあることは必然である。

こうした議論は、『テアイテトス』の当該箇所の論点と共通するものがあると思われる。プラトンから見れば、ソフィストであるプロタゴラスは、実際には知者でもないのに知恵があることを標榜し、先に引用した 161c-e において暗に示されているように、いわば神のように振る舞って他の人に教育を施していた。しかしそのことは、この『饗宴』の議論を当てはめるならば、その人が無知であることを示している。

もとより、他の対話篇で述べられている内容と『テアイテトス』の当該の議論はどのように関連するかについてはすでに様々に論じられており、それはまた別に詳しく検討しなければならない。しかし、前節で論じたように、少なくとも「神に似ること」が語られるこの議論は『テアイテトス』の他の箇所とも密接に関連しており、その意味で『テアイテトス』において積極的な役割を演じていると思われるのである。⁽³⁾

さて、以上の理解が正しければ、『テアイテトス』においては、二つの意味において中間にあるものが論じられていると考えられる。まず人間は、動物と神の間にいる。ブタ、ヒヒ、オタマジャクシなどの動物も知覚することは可能であるが、人間はそれに加えて、対象を〈同じ〉、〈異なる〉などと分節化して把握し、さらには自らの優れたあり方に関わる正・不正、美・醜、善・悪などを思考、考察することができるという点で、他の動物より優れている。しかしそうしたことができるようになるためには長い時間にわたる「多くの苦勞と教育」が必要とされるのであり、金銭と引き換えに短期間で可能になるわけではない。あるいは、そのような努力の結果かりにそれが可能になったとしても、それはおそらく神がもっている完全な知や知恵にはおよばないものである。ソフィストはその点を錯覚し、自分は真の意味の知恵をもっていると考えていた。

次に、そのソフィストと神の間にいるのが哲学者である。ソフィストは、本当は知恵がないのに、自分には知恵があると「思っている」ため、真の知恵を求めようとはしておらず、その意味で実際には無知である。これに対して哲学者は知恵がないと自覚しており、そのため知恵を求めている。このようにソフィストと哲学者を区別するのは、知もしくは知恵に対する考え方である。ソフィストが知者であることを自認し、自ら神のように振る舞っていたのだとすれば、当該の議論Dで述べられているように、「神ならぬもの」に近づいているのかもしれない。逆に知恵をもっていないという自覚にもとづいてそれを求める哲学者の営みが、そこでは「神に似ること」と言い表されている。

しかし注意しなければならないのは、この議論で「神に似ること」が語られるとき、「できる限り (kata to dynaton)」(176b1) という限定がつけられているということである。人間は他の動物とは異なり、「長い時間をかけて多くの苦勞と教育を通して」思考、考察などの能力を備えることによって、自らのあり方を優れたものとする可能性がある。しかし、そのようにして思考、考察などの働きを身につけることができたとしても、それは神がもつ知恵、知にはおよばない。議論Dで述べられているように、少なくとも善と悪が混在しているこの世界のなかで、本当の意味での知、知恵を獲得し、完全に優れたものとなることは、言い換えれば、完全に神と同化することは人間には不可能である。人間が神に似ることができるのは、あくまで「できる限り」においてなのである。ここに、他の動物にはない人間の可能性と、逆にその限界が示されていると考えることができる。

注

(1) Ryle,278.

(2) Waymack,esp.483-484;Rue.

(3) この点、この議論の哲学者像を戯画と見なす Waymack や Rue の解釈はやや極端ではないかと思われる。Annas,52-71 は、Rue の見解に一定の意義を認めながらも、より穏健な見方を示している。なお『テアイテス』のこの議論に関連してしばしば指摘されるように、『法律』(716c4-d1) では「万物の尺度は何よりも神であり、…神に愛されようとする者は、できる限りそれに似たものにならなければならない」と言われている。他に類似の考え方が述べられている箇所としては『国家』(383c,500b-d,613a-b)、『パイドロス』(248a,252c-253c)、『ティマイオス』(90b)、『法律』(792d) などがある。このうち『国家』(377a-383c) では、『テアイテス』の当該の議論と同じく「教育」との連関で神のあり方が論じられている点で興味深い。すなわちそこでは、国家の守護者となるべき若者を教育する際、神が人間と同じような過ちを犯したり、人間にとっての悪の原因でもあるという考え方が述べられるホメロスやヘシオドスなどの物語を聞かせてはならないとされ、神は完全に善なるものであるから悪の原因にはなりえず、自ら変化はしないし、人間を欺いたりもしないと言われている。Sedley,83 によればこれは、従来 of 擬人化された神を批判したクセノファネスの系譜に連なる考え方であり、プラトンが、神は道徳的に善にも悪にもなるというギリシアの伝統的な神観念から根本的に決別したことを示すものである。cf.Adam,111.

文献表

- Adam,J.(1963),*The Republic of Plato*,2nd ed.with an Introduction by Rees,D.A.,vol.1,Cambridge.
- Annas,J.(1999),*Platonic Ethics, Old and New*,New York.
- Rue,R.(1993), "The Philosopher in Flight:The Digression(172c-177c) in Plato's *Theaetetus*",*Oxford Studies in Ancient Philosophy* 11,pp.71-100.
- Ryle,G.(1966),*Plato's Progress*,Cambridge.
- Sedley,D.(2004),*The Midwife of Platonism:Text and Subtext in Plato's Theaetetus*,Oxford.
- Waymack,M.H.(1985),"The *Theaetetus* 172c-177c:A Reading of the Philosopher in Court",*The Southern Journal of Philosophy* 23,pp.481-489.

人間の有限性と神 ——プラトンに即して——

今泉 智之

はじめに

旧約聖書冒頭の「創世記」(1・26)には、よく知られた次のような文章がある。「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう』」(新共同訳『聖書』)。

ここで人間は、神に似せて造られた存在として、他の動物を支配する力をもつものと考えられている。キリスト教のこうした考え方は西洋の思想の基底をなすものの一つとすることができるが、西洋思想のもう一つの源であるギリシア哲学においても、人間を他の動物よりも優位に置き、神に似ることができるとして捉える見方がある。しかし神に似ることができるとしても、人間と神の間には言うまでもなく違いもある。たとえばギリシア語で一般に人間は「死すべきもの」と形容されるが、それは神が「不死なるもの」と呼ばれるのと対比されてのことである。「死すべきもの」としての人間は、限りある生を生きており、その意味で有限である。加えて、いかなる能力をもつかという点でも、人間は他の動物よりは優れているが、神と同じではないと考えられていた。ではそれは、より具体的にはどのような意味においてなのか。ここでは古代ギリシアの主要な哲学者の一人であるプラトンにおいて、動物、人間、神の間にはどのような違いがあると考えられているのかを確認したい。この問題に関するプラトンの思索は、人間のもつ可能性とその限界をよく示していると思われるからである。

1 知覚と知

プラトンのなかでもここで主に取り上げたいのは、文字通り「神に似ること (homoiōsis theō[i])」という考え方が提示される『テアイテトス』である。『テアイテトス』は「知とは何か」を問題にした対話篇であるが、その第一部の中程に「神に似ること」という文言が現れるのである。しかしそれを見るまえに、まず第一部のおよその流れをたどっておきたい。

知覚

『テアイテトス』の第一部では、はじめに、当時の著名な数学者であったと伝えられるテアイテトスが「知 (epistēmē) は知覚 (aisthēsis) にほかならない」という定義を提出する。ここで知覚とは、見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触れるなどの認識を指している。これらはいずれも目、耳、鼻、舌、皮膚などの感覚器官をとおして行われるが、外界のあり方を把握するには欠かすことができないものである。そして知覚を知と見なすとは、これらの認識はすべて正しい、もしくは真であると考え、ということにほかならない。このこ

とは、プロタゴラスの人間尺度説と関連させて説明される。人間尺度説とは「万物の尺度は人間である、〈ある〉ものについては〈ある〉ということの、〈あらぬ〉ものについては〈あらぬ〉ということの」と主張するものである。この説は「それぞれのものが私に現れているちょうどその通りに、それらは私にとって〈ある〉、他方それぞれのものが君に現れているちょうどその通りに、それらは君にとって〈ある〉」ということを示したものだと言われる。そして、この「現れている」が「知覚している」と置き換えられることでテアイテスの定義と関連づけられ、結局テアイテスの定義は「各人が知覚しているものは、その通りに各人にとっておそらく〈ある〉」と定式化されることになる(151d-152c)。

知の条件

プラトンによれば、何かが知であるためには、常に〈ある〉に関わっている、そしてその限りで誤ることはない、という二つの条件を満たしていなければならない。知は知である以上誤ることがないというのは、『ゴルギアス』(454d)や『国家』(477e)など、他の著作にも見られるプラトンの基本的な考え方の一つであるが、テアイテスの定義を敷衍したこの定式化は、知覚がこの二つの条件を満たしていることを示している。たとえば、風が吹いているとき、ある人が皮膚をとおしてそれを「冷たい」と感ずれば、その風はその人にとっては冷たいものとして〈ある〉から、その知覚は誤りではなく、したがって知にほかならないというのである(152b-c)。

以上のように、テアイテスが提出した「知は知覚にほかならない」という定義の具体的な内容は、プロタゴラスの人間尺度説と関連させて説明される。しかしこの定義とプロタゴラスの尺度説はこの後、ソクラテスによって批判されることになる。そして問題の「神に似ること」という考え方は、ソクラテスによるテアイテスやプロタゴラスに対する批判とつながりをもっていると考えられるのである。以下ではそれを確認しながら、この考え方がどのようなことを含意しているのかを探ることにするが、まず「神に似ること」という文言が現れる議論がそもそもどのようなものなのかを見ておく必要がある。

2 「神に似ること」

『テアイテス』において「神に似ること」という考え方が述べられる議論(172c-177c)は、およそ次のようなものである。内容上四つに分けて要約する。

議論の概要

A 知恵(sophia)を愛すること、すなわち哲学に時間をかけて養育された人は、自由に時間の余裕をもって言論を行うが、他方弁論家は、法廷で水時計が促すので、奴隷のように常にせわしく語る。そのため弁論家の魂は狭小で正しくないものになって、思考の健全さもなくなるが、自分では有力者、知者になったと思っている。

B 哲学者は弁論家とは異なり、アゴラへの道や、裁判所や議会などがどこにあるのかなどは知らない。哲学者の思考はこれらすべてを無価値と見なし、むしろ地上では幾何学を、天上では天文学を研究し、あらゆる仕方で存在するものの全体について、それぞれその本

性すべてを探求する。タレスが天文学を研究しようと上方を眺めていて井戸に落ちたとき、トラキアの侍女が、天上のことを知ろうとはするが、自分の面前や足下のことは気づかない、と冷やかした。同じ非難は、哲学にときを過ごしている人すべてにあてはまる。なぜなら哲学者は隣人が何をしているかだけでなく、隣人が人間なのか、それとも何か別の動物なのかどうかもほとんど気づかないからである。むしろ哲学者は、人間とは何であるのか、また何をしたりされたりするのが人間の本性にふさわしく、人間以外のものには備わっていないことなのかを探求し、追求しようと苦勞している。

C しかし逆に、哲学者が大衆を上方に引き上げて、正と不正そのものについて、それぞれはいったい何であるか、両者はいかなる点でそれ以外のすべてのものと、また互いに異なっているのか、そして王であることとは、また人間の幸福と不幸とはどのようなものであり、どのようにして幸福を得、不幸を避けるのが人間の本性にはふさわしいのか、これらのことの考察へ向かわせるとする。その場合今度は大衆の方が不慣れのために悩み、行き詰まって、トラキアの女や他の無教育の人には笑われないが、そうした奴隷育ちではないすべての人の笑いものになる。

D 善には常に悪がついて回り、悪がこの世界にあるのは必然である。そこで、この世界からかの地へできるだけ早く逃げなければならない。それができる限りにおいて神に似ることであり、思慮 (phronēsis) を伴って正しく、敬虔になることにほかならない。悪を避け、善さ・徳 (aretē) を求めなければならないのは、悪しき人ではなく善き人だと「思われる」ため、などではない。むしろ、神は最高に正しいものであり、神に似るにはこの上なく正しくなるほかはないからである。それを知ることが知恵であり、真の徳である。他方それを知らないことが無知であり、明白な悪である。そして不正なことや不敬虔なことを行う人は、自分を無能だと思っていないというその分だけいっそう無能、無知である。なぜならそのような人は不正の罰を知らないからである。その罰とは、愚かさと極度の無知のために、不正な行為によって神ならぬもの (atheon) には似るが、神には似ないということであり、それがもっとも不幸なことである。

「神に似ること」という考え方が現れるこの議論は、見られたように弁論家批判を主な内容としている。まずAでは時間に余裕をもって自由に知恵を求める哲学者と、奴隷のように常にせわしなくしている弁論家の生き方が対比されている。Bでは知恵を愛し、学にいそむ哲学者のあり方が述べられ、続くCでは哲学者と大衆の立場の逆転が描かれている。最後のDで、知を愛し、善さ・徳を求める哲学者の姿勢が「神に似ること」と言い表され、それとは逆の生き方が「神ならぬものに似る」こととして批判されている。

3 テアイテトスープロタゴラス批判

ではこの議論は、『テアイテトス』第一部で展開される、テアイテトスの「知は知覚にほかならない」という定義やプロタゴラスの人間尺度説に対する批判と、どのように関連しているのだろうか。

結論から言えば、重要なのは、この議論において「神に似ること」が語られるとき、神と人間の違いが前提されているということである。人間は神よりは劣った存在であるからこそ、Dにおいて「思慮を伴って正しく、敬虔になる」あるいは「この上なく正しくなる」ことが「神に似ること」として捉えられている。これに対して、テアイテトスの「知は知覚にほかならない」という定義と結びつくと言われているプロタゴラスの人間尺度説は、次に見るように動物、人間、神の三者を類同化する面をもっている。プラトンの立場からすればこれは受け入れがたいことであり、この三つは区別されなければならない。そして、テアイテトスの定義やプロタゴラスの人間尺度説に対する批判のなかで、動物、人間、神の三者は区別される必要があるということが示唆されており、その点で「神に似ること」が語られるこの議論は、テアイテトスやプロタゴラスに対する批判と通底していると考えられるのである。以下でその批判がどのようなものなのかを確認したい。

ソクラテスの主張

ソクラテスはその点に関して次のように述べている。

議論の始まりで、すなわちプロタゴラスが『真理』という書物を始めるにあたって、大げさに、またひどく軽蔑した仕方で語り始めるために「万物の尺度はブタである」とか「ヒヒである」とは言わなかったこと、あるいは知覚の能力をもつ何か他のものと奇妙なものを挙げなかったのを私は不思議に思う。そうしていればプロタゴラスは次のことを示すことになったはずなのだ、すなわち、知恵 (sophia) についてわれわれはあたかも神であるかのようにプロタゴラスに驚嘆しているが、実際は思慮 (phronēsis) に関してカエルの子のオタマジャクシよりも彼のほうが優れている、ということは決してないし、ましてや誰か他の人間と比べた場合は言うまでもない、ということ。…というのは、もし知覚をとおして判断するものが各人にとって真であり、ある人の知覚経験について別の人のほうが優れた仕方で判別するとか、ある人の判断が正しいか誤っているかの考察に関しては別の人のほうが力がある、ということはないのであり、むしろ…各人は自分だけで判断をし、その判断したものはすべて正しく、また真であるのだとしてみよう。その場合、なぜプロタゴラスは知者 (sophos) であり、そのため他の人の教師として多額の報酬を得るに値すると見なすのが正しいことになるのか、他方、各人自身が自分の知恵の尺度であるのに、われわれが彼より知恵がなく、彼のもとを訪ねなければならなかったのはなぜなのであろうか (161c-e)。

ここでは、プロタゴラスの人間尺度説の立場に立つと、プロタゴラス自身が金銭との引き換えで教育を行っていたことが無意味になる、と批判されている。ではプロタゴラスの教育とは、具体的にはどのようなものだったのであろうか。

プロタゴラスの教育

プロタゴラスは当代きってのソフィストであった。その人となりは、プラトンによる同名の著作『プロタゴラス』などに詳しく描かれているが、「ソフィスト」とは、字義通りには「知恵をもつ人」「知者」という意味の言葉である。ソフィストであるプロタゴラス

は自ら知恵をもっていると称して、どうすれば優れた人になれるかを金銭と引き換えに教えていた。その教育の内容は、「神に似ること」が述べられる議論で批判的になっていった弁論家になるために不可欠な技術、すなわち弁論術にほかならない。弁論術は「裁判所で裁判官を、議会で議員を、民会でその出席者を、また市民が集まって行われる他のあらゆる集会で、言論によって説得する能力」（『ゴルギアス』452e）と規定されている。人々は、こうした公の場で多くの者を説得することができれば、やがては「国家有数の人物」になれると信じて、彼の教えを受けていた（『プロタゴラス』316b-c）。その教育の結果プロタゴラスが稼いだ額は、有名なパルテノン神殿の建築の総監督を務めたフェイディアスなど、当時の名高い彫刻家の収入をも上回っていたと伝えられている（『メノン』91d）。

ソクラテスの批判

しかしソクラテスによれば、プロタゴラスがそうした教育を行っていたことは、彼が人間尺度説を唱えていたことと矛盾する。なぜなら、人に教育を施す際には、教育を行う側とそれを受ける側との間に、知恵に関して前者は後者より優れているという関係が成立していなければならないからである。すなわちプロタゴラスが人を教えるためには、プロタゴラスは教育を行う相手より知恵がある必要がある。しかし、もしテアイテトスの言うように知覚が知であるとすれば、知覚の能力はプロタゴラス以外の人間にも備わっているので、プロタゴラスが自分以外の人間を教育する必要はなくなる。すると、知覚が知であるとするテアイテトスの主張とつながりをもつ人間尺度説をプロタゴラスが唱えていたことは、彼が他の人に教育を施して金銭を受け取っていたことと相容れないことになる。それどころか、人間以外の動物にも知覚を行うことは可能なので、人間と動物の間にも知恵の優劣がなくなることになるというのである。

「知は知覚にほかならない」という定義がこのように知恵と関連させて批判されるのは、この議論に先立って、知と知恵は同じものだと言われていたことによると考えられる（145e）。そしてここでは知恵をもつことが、さらに神と結びつけられている点が重要である。引用のなかの「知恵についてわれわれは、あたかも神であるかのように（*hōsper theon*）プロタゴラスに驚嘆している」という皮肉まじりの言い方がそれを示している。しかし、知恵と知が同じものであり、知覚が知であるとすれば、人間同士や人間と動物の間だけでなく、人間と神の間にも知恵に関して優劣がなくなることになるので、プロタゴラスを知者として、あたかも神であるかのように崇拜し、その教育を受けていたことが不合理になる。このように、テアイテトスの定義との連関で引き合いに出されたプロタゴラスの人間尺度説は、知恵に関してそれぞれの人間、人間と動物、さらには人間と神を等し並みに扱うことになり、それはプロタゴラス自身が教育を行っていたことと矛盾するということを指摘することで批判されている。そして先に述べたように、「神に似ること」という考え方が語られる議論においても神と人間の違いが前提されているという意味において、この批判はその議論の内容と結びついていると考えられるのである。

4 動物、人間、神

以上のようなテアイテトスとプロタゴラスに対する批判が含意しているのは、言うまで

もなく知覚は知ではないということである。それとともに、動物、人間、神の三者は区別されなければならないということも明らかにされているのがわかる。

動物と人間

ここでまず、動物と人間の違いについてあらためて考えてみたい。前節で引用した議論でも述べられていたように、知覚の能力はブタ、ヒヒ、オタマジャクシなどの動物にも備わっている。たとえばオタマジャクシは、皮膚をとおして水が冷たいと感じとっているかもしれない。しかし問題は、そうした知覚は常に正しいとは限らないということである。確かに知覚は、外界のあり方を正しく伝えることもあるが、他方誤っていることも多い。たとえば、真っ直ぐな棒を水の中に入れて曲がって見える。この場合、棒が曲がっているという視覚による認識は誤りであると考えられる。これは知覚の不確かさを示すためにしばしば挙げられる例である（『国家』602c-d）。実際は、こうした事例が本当に知覚の可謬性を示しているのか否かについては解釈の余地があるのであるが、ここではその点には立ち入らない。いずれにしても、知覚が実際には誤ることもあり、その限りでは知ではないとすれば、外界について正しい情報を得るためには知覚の正誤を判定する能力が必要となる。それが、前節の引用で「判別」「考察」と呼ばれている働きにほかならない。これらの働きはそこで知覚をとおしての判断が正しいか誤っているかを見きわめるものとされている。そしておそらくプラトンは、知覚とは異なるこうした能力は、人間は獲得することができても動物にはないと考えていたのである。

人間の特質

この点ではまず、当該の議論Cにおいて「正と不正そのものについて、それぞれはいったい何であるか、両者はいかなる点でそれ以外のすべてのものと、また互いに異なっているのか、そして王であることとは、また人間の幸福と不幸とはどのようなものであり、どのようにして幸福を得、不幸を避けるのが人間の本性にはふさわしいのか、これらのことの考察」という言い方がされていることにあらためて注意する必要がある。そこで「考察」は、人間にとっての正・不正、幸・不幸など、相反する事柄を分別する働きと見なされている。知覚をとおした認識の正誤、真偽を判定し、さらには正・不正、幸・不幸を分別するこうした「考察」などの能力は人間に固有のものであり、その意味で人間とそれ以外の動物を区別するしるしとなりうるものと考えられるのである。

このことがより明確になるのは、「知は知覚にほかならない」という定義が最終的に論駁される『テアイテトス』第一部の末尾の議論（184b-186e）である。そこでは、音と色は異なる、硬さと柔らかさは反対であるなどのこと、また美・醜、善・悪などの事柄は、「思考」「考察」などの働きが認識するとされるが、それらは生まれたばかりの人間や動物ももっている知覚の能力とは異なり「かろうじて長い時間をかけて多くの苦勞と教育をとおして」人間に備わると言われているからである。重要なのは、知覚とは異なり、獲得するのにこのように長い時間と労力が必要とされる思考、考察などの能力が、とりわけ正・不正、幸・不幸、美・醜、善・悪など、倫理的な事柄の把握に関わるとされていることである。

倫理

くり返し述べてきたように、『テアイテトス』の議論によれば、動物は知覚を行うことはできるが、思考、考察などの働きはもっていない。正・不正、幸・不幸、美・醜、善・悪などの把握に関わるのが後者だということは、それを備えていない動物はこれらの事柄について考えることができないということにほかならない。これは、人間以外の動物は、倫理的な意味で自分のあり方を優れたものにするには不可能だということを意味している。これらの事柄について考察することは、自分のあり方を優れたものにするためには不可欠と考えられるからである。逆に言えば、こうした事柄について考えをめぐらし、それにもとづいて自分のあり方を優れたものにするということが、他の動物には見られない人間の特性なのである。

ただしこの場合「優れている」ということは、「国家有数の人物」になることとは直接結びつくわけではないことに注意しなければならない。プラトンによれば、人間の善・悪が問題になるときまず第一に考えなければならないのは、そうした社会的な地位や名誉などではなく、その人の心・魂のあり方である。そのことは、魂こそが人間にとって「すべての幸・不幸がそこに関わってくるもの」（『プロタゴラス』313a）という言い方で示されている。また、かりに「国家有数の人物」になることができ、その結果名誉、金銭などが手に入ったとしても、そうしたものの自体は本来は価値をもっていないとプラトンは考えていた。そうした名誉、金銭などに価値が生まれるのは、それを所有している人の魂が優れたものになったときである（『ソクラテスの弁明』30a-b）。

このようにプラトンは、動物と人間の区別を両者がもつ認識能力の違い、とりわけ正・不正、善・悪、幸・不幸などを思考、考察できるか否かという点と結びつけ、またこうした倫理的な事柄を魂のあり方と関連づけていた。当該の議論Dにおいて「神に似ること」と言い表されていたのは、魂を優れたものにするということであり、それは善さ・徳を求める、とも表現されている。しかし善さ・徳を求めるためには、自分には不完全なところがあるということをも認めなければならない。その点を顧みずに不正を行っている人は、議論Dで述べられているように「神ならぬもの」に近づいている。逆に、神は自分よりも優れているという自覚にもとづいて徳・善さを求める営みが「神に似ること」なのである。

人間と神

しかしここで問題になるのは、人間は自分のあり方を優れたものにするということである。動物にはない特徴をもっているとしても、はたして神と同じ高みに達することはできるのかということである。プラトンによれば、少なくともこの世界のなかではそれは不可能である。なぜなら、そのためには正、美、善などに関して決して誤ることがない認識、すなわち知や知恵をもたなければならないが、そうした能力をもつのは神だけだからである。『饗宴』の言葉を用いれば「神々は、現に知者であるから、知恵を愛することはないし、知者となることを求めたりもしない」（204a）ということになる。そしてこの点は、当該の議論においても含意されていると考えられる。というのは、当該の議論Dで「神に似ること」が語られるとき、そこには「できる限りにおいて」という限定がつけられているからである。人間は他の動物とは異なり「長い時間をかけて多くの苦勞と教育をとおして」思考、考察などの能力を備えることによって、自らのあり方を優れたものと

する可能性がある。そしてそれが「神に似ること」にほかならない。しかし、同じくDで述べられているように、この世界のなかには善と悪が混在している。そうした世界のなかで、人間が神と同じ知や知恵を身につけて完全に善なる存在となることは、言い換えれば、完全に神と同化することは不可能である。人間が神に似るのは、あくまで「できる限りにおいて」なのである。ここに、人間は神に比べればその能力には限界があり、その意味で有限な存在であるということが示されているとすることができる。

『テアイテトス』(184-186)における知覚と思考

今泉 智之

はじめに

『テアイテトス』は「知 (epistēmē) とは何か」を主題にした著作である。その第一部では、テアイテトスが提出した「知覚 (aisthēsis) が知である」という第一の定義が論駁されている。本稿で主に取り上げるのは、その末尾で、認識を行う際に知覚と思考、考察などの働きがそれぞれどのような役割を果たすのかが論じられている箇所 (184-186) である。この箇所について議論されてきたことの一つに、ここでプラトンは知覚にも思考や考察など働きを認めているか否か、という問題がある。本稿では、これまでになされてきた主な研究を踏まえながら、『テアイテトス』の当該箇所の、とくに解釈上の問題が多い二つの問答 (185b-e) を検討することで、知覚と思考、考察の関係を考え、あわせて、その問答がもつ意義を示したい。以下では、はじめに当該の議論の概要を確認し (1)、知覚にも思考や考察の働きを認めるべき否かを検討する (2)。次に、二つの問答のうち第一のものに関して出されている修正案の妥当性を吟味したうえで (3)、二つの問答がどのような関係にあるかを考察し、当該の議論のなかで二つの問答がもつ意義を明らかにしたい (4)。

1 議論の概要

まず、184-186 の議論の概要を見ておきたい。そこでははじめに、知覚と思考、考察の役割が対比される。すなわち、われわれは目、耳などの器官 (organon)、あるいは視覚、聴覚などの能力 (dynamis) を通して (dia) 知覚を行うのであるが、それぞれの知覚には色、音など対応する固有の領域がある。他方、色と音について、その〈ある〉〈あらぬ〉や、その双方が互いには〈異なる〉が自分とは〈同じ〉、双方では〈二〉だが、それぞれは〈一〉ということ、さらに〈奇数〉〈偶数〉などのことを思考し (dianoesthai)、また双方は互いに〈似ている〉かそれとも〈似ていない〉かを考察する (episkopein) のは、魂自身が自分自身を通してである。こうした〈ある〉〈あらぬ〉、〈同じ〉〈異なる〉などは、あらゆる知覚対象に適用されるので (185c4-5,e1)、〈共通のもの (to koinon, ta koina) (185b8,c4-5,e1) と呼ばれる (184b4-186a1)。

次に、魂が自分だけ独立で (kath' autēn) 把握する〈共通のもの〉との連関で〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉が引き合いに出されるが (186a8)、〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉の〈ある〉を魂は、過去と現在を未来に向けて自分自身のなかで勘案しながら (analogizomenē)、相互に関係させて考察すると言われる (186a9-b1)。続いて、一方で人間も動物も本来生まれるとすぐ知覚できるものがあり、それは身体を通しての経験 (pathēmata) として魂へ届くが、他方、そうした経験について、〈ある〉と有益性を勘考すること (syllogismos) は、かろ

うじて長い時間をかけて多くの苦勞と教育を通して人間に備わることもある、と主張される(186a2-c6)。

以上を踏まえて、議論は次のように結ばれる。すなわち、〈ある〉に到達できない人は〈真理〉にも到達できず、そうだとすればその人は、何かについて知っていることにはならない。そして身体を通しての経験のうちにはなく、むしろそれらについての勘考のうちには知は存するのであり、人が〈ある〉と〈真理〉を把握しうるのはその勘考の際である。したがって、知覚は〈ある〉を把握しない以上〈真理〉も把握せず、それゆえ知にも与らないのだから、知覚と知が同一であるということにはならない(186c7-e12)。

見られたようにこの議論では、色、音などを認識する知覚の働きと、知覚が捉えた色、音などについて〈共通のもの〉を把握する思考、考察、勘案、勘考などの能力が対比されている。そのため、知覚には〈共通のもの〉を捉えることができないとすると、知覚は思考、考察などの能力とどのような関係にあるのかということが問題になる。これに関しては、大きく分けると次の二通りに整理することができる(cf.Kanayama,33ff.)。

(1) 思考や考察は知覚の働きに含まれる。

(2) 思考や考察の際に知覚の働きは用いられるかもしれないが、思考や考察は知覚の働きとは異なる。

そしてこの問題を考える際とくに検討しなければならないのは、この議論において〈共通のもの〉が導入される場面における次の二つの問答である。

【第一の問答】

ソクラテス「その双方〔色と音〕が塩辛いもので〈ある〉か、〈あらぬ〉かを考察することができるとしたら、それを考察するのは何によってなのかを、もちろん君は言うことができるだろう、すなわち明らかにそれは視覚でも聴覚でもなく、何かそれ以外のものなのだ」(185b9-c2)。

テアイテトス「もちろん、舌を通しての能力です」(c3)。

【第二の問答】

ソクラテス「君の答えは見事だ。しかしそれに対して、これら〔色と音〕に加えて、それ以外のすべてのものにも〈共通のもの〉を君に明らかにするのは、何を通しての能力なのであろうか。その〈共通のもの〉に君は、〈ある〉〈あらぬ〉や、ちょうど今のわれわれの問いのなかで用いてきた名を当てるのだが。それらすべてに、君はどのような器官を割り当ててるのだろうか。その器官とは、それを通してわれわれのうちの知覚する部分がそれぞれのものを知覚する、というものなのだが」(c4-9)。

…中略…

テアイテトス「いや、神に誓ってソクラテス、それを私は言うことができないでしょう。ただ、知覚されるものにはそれぞれに対応する器官がありますが、こうした〈共通のもの〉には、それと同じような固有の器官は、もともと何もないように私には思われます。むし

る魂自身が自分自身を通して、すべてのものについて〈共通のもの〉を考察するように私には見えるのです」(185d6-e2)。

以下では、この二つの問答をめぐる諸解釈を主に検討したい。

2 知覚と思考、考察の関係

知覚と思考や考察の働きがどのような関係にあるかについて、現在の研究動向に大きな影響を与えたのは Cooper の解釈である。そこで、まず Cooper の見方がどのようなものかを簡単に確認しておく必要がある。

Cooper によれば、この議論で述べられている魂の独立した活動、すなわち、魂が自分自身を通して〈共通のもの〉を思考、考察することは、知覚が認識した対象に〈共通のもの〉を適用することであり、その際魂は知覚対象について〈ある〉などの判断を行っている。すなわち、思考などの働きは、〈ある〉を含めた〈共通のもの〉を知覚対象に適用して、それを〈同じ〉〈異なる〉、〈似ている〉〈似ていない〉などと分節化して把握している。そこには反省の働き (reflection) が含まれている。他方、そうした働きと対比される知覚に関しては、Cooper は次の二通りに解釈が可能であるとした。つまり、知覚とは (A) 対象についての単なる感覚的な気づき (sensory awareness) なのか、それとも (B) そうした感覚的な気づきに加えて、色、音などを「赤い」「大きい」などに見なす働き (labelling) まで含むのか、のいずれかである。Cooper は、知覚はここではこのうちどちらに解すべきか明確にされてはいないとしながらも、自身は (B) に傾いた解釈を示した。ただし Cooper は、この場合でも知覚の役割は対象を直接的に把握することだけ、つまり、たとえばある対象の色を単に読みとることだけであり、思考などのように分節化して把握する能力は含んでいないと考えた⁽¹⁾。

この Cooper の解釈では、知覚が認識した色、音などについて反省を加え、〈同じ〉〈異なる〉などと分節化する働きは思考、考察などにだけ備わっていると考えられている。それに対して知覚は、それを (A) 気づきと捉えるにしても、あるいは (B) labelling と見なすにしても、対象を直接的に把握するものである。ただし、知覚を (B) として理解すると、思考や考察との違いが微妙になり、そのため、知覚を先の (1) のように解釈する余地が生ずることになる。たとえば Cooper は、先に見た知覚と思考、考察との間の区分けに関連して、「知覚のために魂を用いること (the perceptual use of the mind)」と「反省・判断のために魂を用いること (the reflective-judgmental use of the mind)」を区別している。しかし他方、知覚している際にも、人は明確な仕方ではないにしても反省、記憶、比較などを行っている、と述べている。すなわち、ある色を赤として認識するためには、以前に経験した赤と赤でない色を思い出して、この色は前者には〈似ている〉が後者には〈似ていない〉ということを経験する必要がある、というのである。ただし Cooper によれば、知覚の際になされるこうした思考は「明確ではない (implicit)」のに対して、ある色が〈ある (存在する)〉、自分とは〈同じ〉だが、自分以外のものとは〈異なる〉などと把握するのは「明確な (explicit)」思考である。プラトンが指摘しているのは、思考にもこの二つの区別があるということだという。つまりこの解釈によれば、「明確な」思考は〈ある〉

を捉えるので知に至る可能性があるのに対して、知覚には「明確ではない」思考が含まれるかもしれないが、それは知となることはできない、ということがこの議論で示唆されていることになる。すなわち、知覚を(B)のような働きと見なすと、知覚は、「明確ではない」にしても、ともかく思考の働きを含むことになるので、先の解釈(1)のように捉えることにつながるわけである(cf.Cooper,130-134)。

そして当の問答に関して、(1)の解釈の可能性をよりはっきりと打ち出しているのは、Cooperの考えを基本的に支持しているModrakである。Modrakは次のように述べている。「何が塩辛いかどうかという問いを考察するのは知覚の働きであり、したがって、その問いに答えるのもまた知覚の働きでなければならない」(Modrak,43)。

しかし、結論から述べると、第一の問答に関して知覚をこのように解釈することについては疑問が生じざるをえない。というのはまず、第一の問答のなかのソクラテスの問いにおける条件文は、しばしば事実と反する仮定と見られているからである⁽²⁾。その見方が正しいとすれば、プラトンはここで、味覚が色や音が塩辛いかどうかの考察を行うことは実際にはありえないものとして記述していることになり、この問答に即して解釈(1)を採用することはそのままでは受け入れがたいことになる。すなわち、この文章を非現実の仮定と解するならば、解釈(2)を採用するのが自然である。

次に、かりにこの条件文が非現実の事態を想定しているとは解さないとしても、(2)の解釈を支持することはできる。すなわちKanayamaによれば、前件に希求法が、後件に直説法の未来が用いられているこの条件文は、仮定の真理性に関して、話し手ソクラテスの考えを何も含意してはいない。しかしそうだとすると、この箇所を次のように理解すれば、解釈(2)を採用することが可能になる。すなわち、明確に思考がなされることは、問いを立てるという働きを前提もしくは含意しているが、現に思考する際に人がさらに進んで関与することはできないような性質の問い「色と音は塩辛いもので〈ある〉か、〈あらぬ〉か」がある。なぜなら、色や音の塩辛さを吟味する方法はないからである。しかしそうだとすると、そうした問いそのものを明確に立てることは可能である。ソクラテスの曖昧さは、明確な思考の働きにはこれら二つの段階もしくは相が含まれることに由来するのである。このKanayamaの解釈では、「色と音は塩辛いもので〈ある〉か、〈あらぬ〉か」という問いを立てること自体は可能だが、味覚がその問いを実際に考察するわけではないと考えられており、したがって、解釈(1)を採用の必然性はないことになる⁽³⁾。

さらに言えば、Cooperによる知覚の説明にも問題があるように思われる。先に見たようにCooperは、色、音などを「赤い」「大きい」などに見なす働き(labelling)まで知覚が含むとすると、知覚は、「明確ではない」にしても、ともかく「思考」を行っていることになるかと解していた。そして、それは解釈(1)を採用していると思なされうる。しかし、少なくとも当該の議論において、知覚の働きを説明する際、Cooperが述べている、以前に経験した赤と赤でない色を思い出して、この色は前者には〈似ている〉が後者には〈似ていない〉ということを経験する、というような事例は挙げられておらず、テキストに書かれていないことを読み込んで疑いがある。冒頭で見たように、視覚、聴覚などの知覚は色、音などそれぞれに固有の領域で働くものであり、〈共通のもの〉である〈似ている〉〈似ていない〉はそれと対比させる形で、色と音が互いに〈似ている〉か〈似ていない〉かを考察する、のように、主語が複数の知覚領域にわたる場合に、それをまたがる述

語として導入されていたのである (185b4-6) ⁽⁴⁾。

3 テキストの修正案について

以上において、当該の議論に関して知覚と思考や考察の関係をどのように捉えるのが妥当かという問題を検討し、知覚は思考、考察とは異なる働きとして理解すべきことを確認した。先に見たように、Kanayama もこのように解釈している。しかし Kanayama はその際テキストの修正を提案しているので、ここでその点にもふれておきたい。すなわち Kanayama は、第一の問答のなかの「それを考察するのは何によってなのか」という疑問文における与格「何によってなのか (hō[i])」の用法は正確ではないとして、それを「何を通してなのか (di' hou)」と改めるべきと主張しているのである (Kanayama,39-40)。そしてこの修正案の背景にあるのは、この議論における「…を通して」と「…によって」の使い分けについての Burnyeat の解釈である。この点では、ソクラテスの次の発言が重要である。

かりに、ちょうど〔トロイアの〕木馬のようなわれわれのなかには多くの知覚する能力が伏しているが、そうした能力すべてが何か一つの形——それを魂と呼ぶべきであるか、あるいは何か他の呼び方をすべきであるとしても——へと向かっていくことはないのだとするならば、確かにそれは恐ろしいことなのだ。その一つの形とは、それによって、われわれが知覚できる限りのものを知覚するものなのであるが、その知覚は、ちょうど器官を通してのように、知覚する能力を通して行われるのである (184d1-5)。

Burnyeat によれば、この箇所では「…を通して」という前置詞は、知覚する能力もしくは器官を示すために、他方「…によって」という与格の表現は、知覚する主体としての一なる魂を示すために用いられている。すなわち「…によって」という与格は、知覚の主体である魂の働きを示唆するものである。それに対して、「…を通して」という言葉で示されている視覚、聴覚などの知覚する能力、もしくは目、耳などの器官は、その一つひとつが知覚を行う主体なのではない (Burnyeat (1976);(1990),53-55)。この解釈のポイントの一つは、「…を通して」という前置詞を用いて表される知覚そのものには認識主体としての役割を帰すことはできず、認識の主体は「…によって」という表現で示されている魂である、と考えることにある。知覚の能力もしくは器官は、あくまで外界と認識主体としての魂を媒介するにとどまるのである ⁽⁵⁾。

Kanayama が先のようなテキストの修正を提案するのは、Burnyeat がこのように、「…によって」という与格は認識の主体である魂の働きを示唆するものである、と主張するのを踏まえてのことである。なぜなら、「…によって」という与格表現が認識の主体を示しているとするならば、第一の問答における「色と音が塩辛いもので〈ある〉か、〈あらぬ〉かを考察することができる」としたら、それを考察するのは何によってなのか」という問いでは、「考察」の主体が問題にされていることになり、その問いに「舌を通しての能力」(味覚)と答えるのが正しいとするなら、ここでは味覚が「考察」の主体として認められ

ていることになるからである。それは解釈（1）を採ることにつながる。そこで Kanayama は、第一の問答における「考察する」の文法上の主語はテアイテトスだとしても、テキストを先のように修正したうえで、意味上は主語として魂という語を想定して、この部分は「魂が舌の能力を通して考察する」と理解するのが正しい、と主張している。そしてそのことによって、知覚にも思考、考察する働きを帰する解釈（1）が排除されることになるのである。

しかし、テキストをこのように修正することには多少抵抗がある。というのは、当該の議論の冒頭において、人は「目によって」白いものや黒いものを見、「耳によって」高い音や低い音を聞くという言葉遣いは正しくないとして、「目を通して」見、「耳を通して」聞くと改めなければならないとソクラテスがはっきりと指摘しているからである（184c7-9）。先に引いた、魂「によって」、知覚の能力もしくは器官「を通して」知覚する、というソクラテスの発言は、この指摘を踏まえたうえで述べられたものである。そうだとすると、この二つの用語の対比に正確であるべき当該箇所第一の問答において、Kanayama が指摘しているような書き違えをプラトンがしたとは考えにくいように思われる。

では、Burnyeat の解釈を受け入れながら、ソクラテスの問いにおいて「何によってなのか」という与格による表現が使われていることの意味を、第一の問答のテキストに修正を加えずに読みとることはできるであろうか。

第一の問答の直前では、色と音について、その〈ある〉〈あらぬ〉、その二つは互いには〈異なる〉が、自分とは〈同じ〉、また双方では〈二〉だが、それぞれは〈一〉だということ、またその双方は互いに〈似ている〉か〈似ていない〉かなどを捉えるのは思考、考察などの働きだということがソクラテスとテアイテトスの間で同意された。そのうえで、視覚や聴覚「を通して」は把握できないこうした〈共通のもの〉を思考するのは、何を通してなのかという問いが立てられ、その問いを考えるための証拠になるものとして（185b9）、まず第一の問答が語られる。ここであらためて注意する必要があると思われるのは、第一の問答の事例においては、主語はその直前の例と同様に色と音であるが、述語が「塩辛い」という、通常では色や音に述定されるとは考えられない性質だということである。そこでは、視覚と聴覚に加えて、味覚の働きも関わる可能性がある。それに、それ以前は〈共通のもの〉は述語として立てられていたが、この場合（〈ある〉〈あらぬ〉）は主語である色と音と、「塩辛い」という述語を結びつけるコプラの役割を担っている。するとこの事例では、色と音が〈ある〉〈あらぬ〉、その二つは互いには〈異なる〉が、自分とは〈同じ〉などのことを思考する場合以上に、視覚、聴覚、味覚というそれぞれの知覚能力を統一して把握し、かつ、〈共通のもの〉である〈ある〉〈あらぬ〉を捉えて思考や考察を行うものが必要とされていると考えられる。そうでなければ、それぞれの知覚がばらばらに働くことになりかねず、それは先の引用にあるように「恐ろしいこと」だからである。すなわち、第一の問答で取り上げられる例ではとくに、認識の主体である魂の個性が強く求められる。そして認識主体としての魂の関与が、「…によって」という表現によって端無くも示されているのではないであろうか。

もとより、以上の読み方が完全に正しいと言い切れるわけではないことも認めなければならない。率直に言って第一の問答は、その内容と用語の両面において曖昧な点を含んで

いることは否定できず、その正確な意味を読み取ることは困難である。だからこそ、すでに見たような様々な解釈やテキストの修正が提案されてもいる。しかし、以上のような理解の仕方もまた一つの可能性として許されるとするなら、第一の問答を読む際テキストに修正を加えなくとも、「舌を通しての能力」すなわち味覚には思考や考察の働きは含まれないとする立場を採り、味覚などの知覚と思考や考察の働きを区別することはできることになるかもしれない。認識を行う際、知覚と思考、考察などが同時に働くことは十分に考えられることである。しかしだからといって、知覚そのもののうちに思考が含まれるということには必ずしもならない。思考や考察は、〈同じ〉〈異なる〉などと対象を分節化して把握するものであり、知覚にその働きは含まれないと見なすのが、先にも述べたように妥当な理解だと思われる⁽⁶⁾。

ここであらためて、第一の問答をどう理解するかというこれまで検討してきた問題を簡単に整理すると、次のようになる。まず、その条件文を事実反する仮定と見なす読み方では、「舌を通しての能力」が現実に「色と音が塩辛いもので〈ある〉か、〈あらぬ〉を考察する」ことはありえないことになるので、解釈(2)が支持される。他方、この文は必ずしも事実反する想定をしているわけではないとする Kanayama の解釈では、ここでは思考の働きには、先に見たような二つの段階もしくは相が含まれると見なされることになる。この解釈でも結局解釈(2)が採られることになるが、テキストの修正を伴っている。これに対して、以上に述べたことを踏まえれば、テキストに修正を施さなくても、知覚には思考や考察の働きは含まれないという解釈を採ることはできるかもしれない。ただしそのことは、魂が思考や考察を行っている際に知覚が働いていることを必ずしも排除するものではない。

4 二つの問答の関係

ところで当該の二つの問答の意味を理解するためには、両者がどのように関係しているのかということも検討する必要がある。この点で問題になるのは、第二の問答のなかでソクラテスが「しかし、それに対して」と述べているのは、第一の問答と何を対比させてのことなのかということである。

これに関して、Kanayama はおよそ次のように述べている。すなわち、第一の問答における「その双方〔色と音〕は塩辛いもので〈ある〉か、〈あらぬ〉か」という問いにおいては、知覚の能力を通しての思考だけでなく、〈共通のもの〉の把握に関わる魂自身の思考も描かれている。ここで魂は「塩辛い」および〈ある〉〈あらぬ〉という二つの概念を扱う際に、二つの手段「味覚」と「魂自身」を用いている。ソクラテスが第一の問いを導入するとき、テアイテトスの注意は自然に、塩辛さを扱うための手段へと向けられることになる。そのためテアイテトスは「舌を通しての能力」と答える。そこで、続く第二の問答でソクラテスは、テアイテトスの注意を、思考の働きには〈共通のもの〉が含まれるということと、こうした〈共通のもの〉を使用する際に必要な手段〔魂自身〕、この二つのことに向けている。第一の問答と第二の問答では、思考の働きが遂行される際に用いられる二つの手段、すなわち味覚などの知覚と魂自身が対比されているのである (Kanayama,41)。

ここで、第一の問答と第二の問答の関係を考えるために、もう一度論の運びを簡単に確認しておきたい。まず第一の問答においては、「色と音が塩辛いもので〈ある〉か、〈あらぬ〉か」を考察するのは、「舌を通しての能力」(味覚)であるとされた。しかし、その考察には〈共通のもの〉である〈ある〉も含まれており、魂も関わっている。そのことが「…によって」という与格の表現によって暗に示されている。続く第二の問答では、話題の中心が、〈ある〉を含む〈共通のもの〉の把握に移っている。〈共通のもの〉は「魂自身が自分自身を通して」考察するものである。これは言い換えるならば、その把握には身体に帰属する働きは必ずしも伴うわけではないということである。そうだとすると、第一の問答と第二の問答では、Kanayama の言うように、思考の働きが遂行される際に用いられる二つの手段、すなわち味覚などの知覚と魂自身も対比されているかもしれないが、それに加えて、知覚と思考や考察がともに働いて認識を行う場面と、魂だけが思考や考察を行う場面もまた対比されているように思われる。

こうした理解は、これまで検討してきた二つの問答についてのソクラテスのまとめの言葉と、それ以降の議論の流れも裏打ちしてくれるのではないであろうか。ソクラテスは第一の問答と第二の問答の対比を次のように要約している。

もし、一方のものは魂自身が自分自身を通して考察し、他方のものは身体を通して考察するように君〔テアイテス〕に思われるならば、…君は親切にも私をこれまでのとても長い議論から解放してくれたことになる(185e5-7)。

このソクラテスの発言のうち、「一方」以下は第二の問答を、「他方」以下は第一の問答を受けている。前者が魂だけで行う考察であり、後者は魂が知覚の能力や器官を通して行う考察であるが、「考察する」という動詞の主語・主体はいずれの場合も魂であるから、魂は双方の場合に関与していると考えなければならない。すると両者の違いはむしろ、魂による考察の際、身体に帰属する知覚の能力もしくは器官も同時に働いているか否かという点に存することになる。そしてこれ以降(186a2 ff.)に話題の中心になるのは前者、すなわち魂だけによって把握されるものの検討であり、テアイテスが提出した「知覚が知である」という定義の論駁に重要な意味をもつことになるのが、このように身体が直接は関わらない認識の働きなのである。その証拠にこの後、議論のなかで魂そのものの働き、魂の内省ということがくり返し述べられることになる。すなわち、まず〈共通のもの〉の一つである〈ある〉には「魂が自分だけ独立で(kath' autēn)到達する」ことが確認される(186a2-5)。次に〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉の〈ある〉を魂は、過去と現在を未来に向けて「自分自身のなかで(en eautē[i])」勘案しながら相互に関係させて考察すると言われる(186a9-b1)。さらに、硬さや軟らかさの〈ある〉や、その二つが互いに〈反対であること〉などへは「魂自身が赴いて(autē hē psychē epaniōusa)、相互に比較しながら判別を試みる」とされる(186b6-9)。ソクラテスはそれを踏まえて、身体を通しての経験(pathēmata)のうちにはではなく、むしろそれらについての勘考(syllogismos)のうちには知は存し、人が〈ある〉と〈真理〉を把握しうるのはその勘考の際であることを指摘する。そのうえで、知覚は〈ある〉を把握しない以上〈真理〉も把握せず、それゆえ知にも与らないのだから、知覚と知が同一であるということにはならないとして、テアイテスの定義は論駁される

のである (186c7-e12) ⁽⁷⁾。

そして、先に引用した、二つの問答についてのソクラテスのまとめの言葉以降、話題が魂自身の把握するものに移っているという見方は、この場面で導入される〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉の性格に着目することでも裏づけられると思われる。この〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉は、第1節冒頭で見たように未来との関連で言及されているため、177c-179d の議論との連関がしばしば指摘されている (Cooper,142;Kahn,124;Kanayama,70;Sedley,109)。すなわち 177c-179d においては、未来における発熱の有無、酒の旨さ・まずさ、音の調和・不調和などについては、それぞれ医者、酒造りをする農夫、音楽家など専門家の判断のほうが、素人の判断よりは優れていると主張されている。しかし、注意しなければならないのは、この主張と当該の議論との間には、次のような違いもあるということである。まず当該の議論では、177c-179d において引き合いに出される、酒の旨さ・まずさ、音の調和・不調和のような特定の領域における善・悪ではなく、端的に〈善〉〈悪〉や〈美〉〈醜〉に言及している。また当該の議論では、177c-179d とは異なり、医者、農夫、音楽家などの専門家には触れていない。さらにそうした端的な〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉の〈ある〉の考察の際に働く「勘案」は、「かろうじて長い時間をかけて多くの苦勞と教育を通して、それが備わる人がいるとすれば、その人には備わる」(186c2-5) と言われている。この言い方は、実質的には否定の意味合いが濃い。これらの点は、ここでの〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉は、酒の旨さ・まずさ、音の調和・不調和など、専門家が経験的に把握する特定の領域の善・悪ではなく、より高度な、いわば哲学者が探求する〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉を指し示していることを意味していると考えられるのである ⁽⁸⁾。そしてもしこの理解が正しいとすれば、この点からも、当該の議論においては、身体に属する知覚の能力もしくは器官を通して行う認識から、魂自身を通して行う認識へと論点が推移していることが裏づけられると思われる。

このように見てくると、これまで検討してきた二つの問答は、当該の議論のなかで、認識するために身体に帰属する能力もしくは器官が必ずしも必要ではないものがあることをテアイテトスに認識させるという意義をもっていると言することができる。そのなかでも、第一の問答における「色と音は塩辛いもので〈ある〉か、〈あらぬ〉かを考察することができる」としたら、それを考察するのは何によってなのか」という問いは、そのことに最初に気づかせる役割を担っていると見られる。この問いを非現実の仮定と見なすかどうかという問題は措くとしても、この事例は、通常知覚を行っている場合には考えられにくい特異な問題を提起していることは確かである。それが契機となり、〈ある〉〈あらぬ〉を含めた〈共通のもの〉を魂はどのように把握するのかという問題に論点が移行していく。その問題に対するテアイテトスの答えが、「魂自身が自分自身を通して」考察する、というものであり、そう答えることによってテアイテトスは、「知覚が知である」という自分が提出した定義を結局否定せざるをえなくなる。ソクラテスはテアイテトスからこの答えを引き出すために、いったんこうした現実離れした問題を立て、認識の際魂そのものが果たしている役割にテアイテトスの注意を促しているとも考えられる。そうだとすると、第一の問答でとられている事例は、テアイテトスの定義を論駁するために周到に選ばれたものかもしれないのである。

以上において、『テアイテトス』の当該の議論における二つの問答をどう読み解くべきかを検討しながら、知覚にもある種の思考や考察の働き帰する解釈は論拠に乏しく、知覚と思考、考察は区別すべきであることを論じた。またあわせて、その二つの問答は当該の議論のなかで、認識するために身体に帰属する能力もしくは器官が必ずしも必要ではないものがあることをテアイテトスに認識させるという役割をもっていることを示した。身体に帰属する知覚の働きと、優れて魂に帰属する思考、考察などの能力を区別し、後者を重視するのは、『パイドン』『国家』などのプラトン中期の著作で示された見方であるが、その見方は、一般にプラトン後期の始まりに位置するとされる『テアイテトス』においても保持されていると考えるのが妥当だと思われるのである。しかし『パイドン』『国家』などの中期の著作と、後期の始まりに位置するとされる『テアイテトス』における議論との関係をどう考えるかについては、すでに様々な解釈が提出されている。その詳しい検討は今後の課題としたい。

注

(1) cf.Cooper,126-134.Cooper に先立ち Cornford,108 は、ここでの主張は、「ここに緑が〈ある〉」のような最も単純な判断すら、知覚に固有の領域、すなわち緑についてのわれわれの直接の気づき (our immediate awareness of green) を超えているという意味である、と述べていた。他方 labelling とは、Cooper,130,132 によれば、色、音などに「赤い」「大きい」などの名を付けること、あるいは分類すること (classification) である。

(2) この読みは Cornford,104;McDowell,67;Holland,103;Burnyeat (1976),48,n.57;Polansky,168 などが採用している。

(3) Kanayama,33-34 は、Goodwin,168 を引いて、この条件文をこのように理解している。この形は、Smyth が less vivid future condition と分類しているものの变形である。通常は前件が ean + 接続法になる。cf. § 2359 ff. § 2361a によると、プラトンにおける類例は『メノン』80d;『パイドン』91a;『法律』658c などに見られる。

(4) テキストでは、硬さや軟らかさの〈ある〉や、その二つが互いに〈反対であること〉などへは、魂自身が赴いて、相互に比較しながら判別を試みる、と言われている (186b6-9)。この場合、判別 (krinein) は魂に帰属する働きであり、知覚に帰属するわけではない。またこの事例も Cooper の用いている例とは異なる。なお、Cooper や Modrak の解釈では、知覚〔が行う判断〕が誤りえないものと見なされる可能性がある。cf.Cooper,142;Modrak,40.Shea は、この二人に共通するこうした傾向はプラトンを現象主義者として解釈するもので、それは知覚は真理を捉えないというソクラテスやプラトンの基本的な考え方に反するとして、批判している。cf.Shea,esp.4-6,10-12.

(5) Burnyeat によれば、知覚を行うことは、外界との単なる「遭遇 (encounter)」もしくは「通過させる働き (transaction)」にすぎない。cf.Burnyeat (1976),36,50.

(6) Burnyeat (1976),41-42 も、第一の問答では「…を通して」と「…によって」の対比が崩れていることを認めているが、哲学的な内容が問題とならない限り、用語に厳密さを求めないのがプラトンの原則だとしている。また Burnyeat は、注(2)でふれたように、第一の問答を非現実の仮定と見なしているので、「…によって」のままでも問題はないことになる。なぜならこの文全体が非現実の仮定であるとするなら、味覚はいずれにしても

考察を行うことはないと言っていることになるからである。

(7) -ma[ta]という接尾辞は一般に行為の結果を示す。したがって、身体を通しての経験 (pathēmata) についての勘考の際、知覚が同時に働いていると見なす必要はない。

(8) この点は、拙稿『『テアイテトス』(186c4)における「教育」の一解釈』、『人文論叢』(三重大学人文学部文化学科)第22号、2005年、49-64頁、で論じた。

文献表

- Burnyeat, M.F. (1976), "Plato on Grammar of Perceiving", *Classical Quarterly N.S.* 26, pp.29-51.
— (1990), *The Theaetetus of Plato, with a Translation of Plato's Theaetetus by M.J. Levett*, Indianapolis.
- Cooper, J.M. (1970), "Plato on Sense-Perception and Knowledge (*Theaetetus* 184-186)", *Phronesis* 15, pp.123-146.
- Cornford, F.M. (1935), *Plato's Theory of Knowledge*, London.
- Goodwin, W.W. (1965), *Syntax of the Moods and Tenses of the Greek Verb*, New York.
- Holland, A.J. (1973), "An Argument in Plato's *Theaetetus* 184-6", *Philosophical Quarterly* 23, pp.97-116.
- Kahn, C. (1981), "Some Philosophical Use of 'to be' in Plato", *Phronesis* 26, pp.105-134.
- Kanayama, Y. (1987), "Perceiving, Considering, and Attaining Being (*Theaetetus* 184-186)", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 5, pp.29-81.
- McDowell, J. (1973), *Plato Theaetetus*, Oxford.
- Modrak, D.K. (1981), "Perception and Judgment in the *Theaetetus*", *Phronesis* 26, pp.35-54.
- Polansky, R.M. (1992), *Philosophy and Knowledge: A Commentary on Plato's Theaetetus*, Cranbury.
- Sedley, D. (2004), *The Midwife of Platonism: Text and Subtext in Plato's Theaetetus*, Oxford.
- Shea, J. (1985), "Judgment and Perception in *Theaetetus* 184-186", *Journal of the History of Philosophy* 23, pp.1-14.
- Smyth, H.W. (1956), *Greek Grammar*, revised by Messing, G.M., Cambridge Mass.

『テアイテトス』(186c4)における「教育」の一解釈

今泉 智之

はじめに

『テアイテトス』は「知 (epistēmē) とは何か」を論じた対話篇であるが、その第一部においては、テアイテトスが提示した「知覚が知である」という第一の定義が論駁されている。その定義に対する批判は多岐にわたるが、それが最終的に論駁される議論(184b-186e)においては、知覚は〈ある〉ということに到達しないのに対して、思考、考察、勘案などの能力は〈ある〉を把握できるとされ、〈ある〉を捉えるこうした能力を獲得するには「多くの苦勞と教育」(186c4)が必要とされている。プラトンにおいては、〈ある〉を捉えることは、何かが知であるための重要な条件と見なされている。そうだとすれば、〈ある〉を把握するこれらの能力を獲得するために「多くの苦勞と教育」が必要というときに何が念頭に置かれているかを考えることは、この議論を読み解くための大切な課題となる。しかし、この議論に関して研究者たちはこれまで主に、ここで知覚はどのような能力と見られているのか、あるいは、思考、考察などの能力が〈ある〉を把握するとはどのような意味なのか、などの問題を検討することで、テアイテトスによる第一の定義の論駁の意義を探ろうとしてきた。もとより、これらの問題を考察することもこの議論の読解のためには不可欠であり、本稿でもそれに立ち入ることになる。しかし、ここで主に考えたいのは、重要であるにもかかわらず、これまで主題的には検討されてこなかった「多くの苦勞と教育」、とくに「教育」ということで何が含意されているか、ということである。それを検討するには、合わせて、先行する議論と 184b-186e の内容の関連を考慮しなければならない。そこで、以下では次のような手順で論ずることになる。まず、当該の議論とこれまでの研究史を概観したうえで、「苦勞と教育」という表現を検討することの重要性を確認する(1)。次に、先行の議論も参照しながらこの言葉、とくに「教育」が何を含意しているかを明らかにする(2)。そのうえで、本稿での考察が、先行研究に対してどのような意義をもつのかを述べる(3)⁽¹⁾。

1

まずこの議論をA、B、Cの三つに分けて概観しておきたい。

A 184b4-186a1 ここでは次のことが示される。すなわち、われわれは目、耳などの感覚器官もしくは感能を通して (dia) 知覚を行うのであるが、それぞれの感能には対応して色、音など固有の領域がある。他方、色と音について、〈ある〉〈あらぬ〉、互いには〈異なる〉が、自分とは〈同じ〉、また双方では〈二〉だが、それぞれは〈一〉ということ、またその双方は互いに〈似ている〉か〈似ていない〉か、さらに〈奇数〉〈偶数〉な

ど——これらは「共通のもの (to koinon, ta koina:185b8,c4-5,e1)」と呼ばれる——を思考・考察するのは、魂自身が自分自身を通してである。

B 186a2-c6 ここではまず、「共通のもの」には魂が独立で (kath' autēn) 到達することが確認されたあと (186a2-8)、その連関で引き合いに出された〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉(a9) に関して、テアイテトスが次のように述べる。

(B 1) これら〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉についても、その〈ある〉を魂は、とりわけそれらを相互に関係させて考察するように思われるのであるが、それは過去と現在を未来に向けて自分自身のなかで勘案しながらである (186a10-b1)。

これを受けてソクラテスは、魂は、硬いものの硬さと軟らかいものの軟らかさを触覚を通して知覚することを主張し、テアイテトスが承認する (186b2-5)。続いてソクラテスは、間にテアイテトスの同意を挟んで次の二つを述べる。

(B 2) [硬・軟の]〈ある〉ということ、またその両者が互いに反対だということ、さらにその反対だということ [反対性] の〈ある〉、これらは魂自身がその方に赴いて、相互に比較しながら判別を試みる (186b6-9)。

(B 3) すると、一方で人間も動物も本来生まれるとすぐ知覚できるものがあり、それは身体を通しての経験 (pathēmata) として魂へ届く⁽²⁾。他方それらについての、〈ある〉と有益性に関しての勘案は、かろうじて長い時間をかけて多くの苦勞と教育を通して、それが備わる人がいるとすれば、その人には備わるのではないか (186b11-c5)。

これにもテアイテトスは同意する (c6)。

C 186c7-e12 以上を踏まえて議論は次のように結ばれる。すなわち、〈ある〉に到達できない人は〈真理〉にも到達できず、そうだとすればその人は、何かについて知っていることにはならない。そして身体を通しての経験のうちにはなく、むしろそれらについての勘考のうちには知は存するのであり、人が〈ある〉と〈真理〉を把握しうるのはその勘考の際である。したがって、知覚は〈ある〉を把握しない以上〈真理〉も把握せず、それゆえ知にも与らないのだから、知覚と知が同一であるということにはならない。

以上のようにこの議論では、認識の働きとして知覚 (aisthanesthai)、思考 (dianoesthai)、考察 (episkopein など)、勘案 (analogizesthai)、判別 (krinein)、勘考 (syllogismos) などが挙げられている。これらのうちでは大きく分ければ、〈ある〉を把握できない知覚と、〈ある〉を含めた「共通のもの」を捉えることに関わるそれ以外の働きとの間に線が引かれる。そこでこの場合、知覚は〈ある〉を捉えられない以上〈真理〉も把握せず、それゆえ知には与らないというとき、それはどのような意味なのかということが問題になる。その際、〈ある〉を捉えることに関わる能力の一つである勘案はB 3において「かろうじて長い時間をかけて多くの苦勞と教育を通して、それが備わる人がいるとすれば、その人には備わる」と言われている。そのため、この議論の意義を理解するためには、〈ある〉の意味をどう解釈するかということが、それを把握する能力を獲得するために必要とされる「教育 (paideia)」とはどのようなものなのかという問題とも関連しながら、重要なポイントになってくる。この事情は、これまでの研究史を振り返るとさらにはっきりしてくる

と思われるので、以下ではまずそれを、必要な範囲で見たい。

当該の議論に関する現在の研究動向に大きな影響を与えたのは Cooper の解釈である。Cooper によれば、この議論で述べられている魂の独立した活動、すなわち、魂が「共通のもの」を認識することとは、「共通のもの」を知覚対象に適用することであり、その際魂は知覚対象について〈ある〉などの判断を行っている。すなわち、思考などの働きは、〈ある〉を含めた「共通のもの」を知覚対象に適用して、対象を〈同じ〉〈異なる〉、〈似ている〉〈似ていない〉などと分節化して把握している。そこには反省の働き (reflection) が含まれている。他方、そうした働きとは対比される知覚に関しては、Cooper は次の二通りに解釈が可能であるとした。つまり、知覚とは (A) そうした反省の能力を含まない、対象についての単なる感覚的な気づき (sensory awareness) なのか⁽³⁾、それとも (B) そうした感覚的な気づきに加えて、色、音などを「赤い」「大きい」などに見なす働き (labelling) まで含むのか、のいずれかである。Cooper は、知覚はここではこのうちどちらに解すべきか明確にされてはいないとしながらも、自身は (B) に傾いた解釈を示した (cf. Modrak, 42 ff.)。ただし Cooper は、この場合でも知覚の役割は対象を直接的に把握することだけ、すなわちたとえばある対象の色を単に読みとることだけであり、思考などのように分節化して把握する能力は含んでいないと考えた (Cooper, 126-134)。

以上のような Cooper の解釈に対して Burnyeat は、知覚の役割を極度に限定した。彼は当該の議論における〈ある〉を命題におけるコプラと見なし、知覚が〈ある〉を捉えない、とは、知覚は「x は F である」のような命題の形式で判断を行うことができない、ということの意味だと解している (Burnyeat (1976), 44-45; Burnyeat (1990), 59-60)。彼は「気づき」や「意識 (consciousness)」の働きにおいてすら、何かがある〈である〉と気づく、というように、〈ある〉という語はコプラとして含まれていると考えているので、〈ある〉を捉えられない知覚には、Cooper の選択肢 (B) の labelling の能力どころか、(A) の「気づき」や「意識」の働きさえも備わっていないことになる。知覚とは、そうした能力を欠いた、外界との単なる「遭遇 (encounter)」もしくは「交渉 (transaction)」にすぎないのである (Burnyeat (1976), 36, 50)。そこで、逆に命題の形で判断を構成することさえできれば、それはコプラとしての〈ある〉を捉えることにほかならず、それが知につながることになる。

〈ある〉の意味に関して、Burnyeat の見方を大筋で支持したのが Kahn である。Kahn は、この議論で〈ある〉は (a) 物事の実際のあり方、事実を示している、(b) 物事が F である、もしくは F でないという判断の形で事実を主張すること (assertion) を簡潔に表現している、の二通りに解釈可能とするが、Kahn が強調しているのは、この議論で〈ある〉は真ということを示す (veridical) 語として用いられているということである。すなわち彼は、思考や判断などが真か偽であるために必要になるのは (b) のような構造だとして、二つのうちより適切なものは (b) と考えたのである (Kahn, 118-123; 133, n.38)。

しかしこのように Burnyeat 近い見方を示した Kahn の解釈は、Kanayama に批判された。Kanayama の解釈は、知覚を「何かを F として気づくこと」と解し、他方〈ある〉は「客観性」もしくは「この世界の物事がどのようなあり方をしているか」を示している、と解することを柱にしている。これは知覚の身分については Cooper の選択肢 (A) を採用し、〈ある〉の意味については Kahn の選択肢 (a) に近い立場をとったことになるが、Kanayama

は Kahn が〈ある〉を主に (b) として理解するのをおよそ次の二点から批判した。

(1) (b) の解釈によれば、テアイテトスの定義の批判は、知覚は判断とは異なり、知に不可欠なのは判断であることを指摘することでなされることになる。しかしその場合には、論駁されるのは、判断の要素を欠いている何ものかとして理解された知覚が知である、という立場にすぎない。この場合 [たとえば Burnyeat のように]、知覚という語は判断の要素を欠いたものとして使われるべきとする一方、知覚と一致する判断は知覚者にとって真であり、それゆえ知であると主張できるので、テアイテトスの「知覚が知である」という定義はなお擁護できることになる。(2) 〈ある〉が Kahn の解釈 (b) 「物事が F であると判断する」のようなことを表しているだけだとすれば、〈ある〉に到達するには、身体を通しての知覚経験 (pathēmata) を命題の構造のなかで明確にすることだけで十分であり、それは B 3 で述べられているように「苦勞と教育」が必要なほど困難ではない。これに対して Kahn の選択肢 (a) のように解すると、身体を通しての経験は必ずしも世界のあり方を反省することにはつながらないのであれば、反省や思考の働きを含む勘案 (B 1、3)、勘考 (C) は〈ある〉に到達するには確かに必要になる。〈ある〉に到達して事実をつきとめることができるように勘案することは困難だからである (Kanayama, 60-62)。このように Kanayama の解釈では、〈ある〉は単なるコプラよりも厳しい意味 (事実、客観性) を担っているので、知覚は (対象を二項関係で認識する) 「気づき」であると解することも認められることになっている。

以上のように、当該箇所では知覚はどのような能力として捉えられているのかという問題については、〈ある〉の意味をどう理解するかという問題とも連動して、諸解釈が錯綜している。知覚は、たとえばある色を「赤い」と見なす働き (labelling) まで含むのか (Cooper)、あるいは (何かを何かとして) 気づくことなのか (Kanayama)、それとも、認識主体と外界を単に媒介する役割を果たすだけなのか (Burnyeat)。また 〈ある〉は命題におけるコプラなのか (Burnyeat, Kahn)、それとも「客観性」というもっと厳しい意味を含んでいるのであろうか (Kanayama)。

こうしたかなり錯綜した研究状況にあつて、〈ある〉を把握する能力を獲得するために必要とされる「教育」とはどのようなものなのかという本稿で主に問題にする論点は、とりわけ Kanayama の Kahn に対する批判の (2) に関連するものである。その批判のポイントは、Burnyeat や Kahn のように 〈ある〉を命題におけるコプラと見なすのは、当該の議論の解釈としては緩すぎる、という点にあると言える。〈ある〉を「事実」もしくは「客観性」というもっと厳しい意味で考えなければ、〈ある〉を把握する能力の獲得には「長い時間をかけて多くの苦勞と教育」が必要だとする B 3 を理解することはできない、ということである。この Kanayama の Kahn 批判は妥当なものなのかを検討する際には、B 3 における「教育」が何を含意しているかを合わせて考察することが避けられないのである。この点は Burnyeat も示唆しているが (Burnyeat (1990), 64-65)、しかしこの課題を主題的に検討した研究は、管見の限りではこれまでのところ、まだなされていないようである。このことも、本稿でその問題を考察しようとする動機の一つになっている。

ところで、このときさらに付随して生じてくる問題がある。Kanayama の Kahn 批判の (2) は、「 x は F である」という命題の形で判断を行うこと自体はそれほど困難ではないということを前提しているように思われるが、しかしそうした命題の形で判断を行うこ

とがどれだけ難しいのかは、Fの内容に応じても変わってくると考えられる。そしてFの内容は何かを考えるにあたってとりわけ考慮しなければならないのが、B1やB3で言及されてる〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉や有益性である。B3で、その獲得のために「苦勞と教育」が必要な能力として直接挙げられているのは「勘案 (analogismata)」であるが、それはB1とB3だけに現れている。続く議論Cにおいて、知は「身体を通しての経験」のうちにはではなく、むしろ勘案と同根の「勘考 (syllogismos)」のうちに存すると言われていることから、B1とB3がテアイテトスの第一の定義を論駁する際ポイントの一つになっているのは明らかである。そうだとすると、Kanayama の Kahn 批判が妥当なものなのか否かを検討するためには、当該の議論のB1やB3で〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉や有益性に言及されるとき、何が念頭に置かれているのかが問題になってくる。それがわかれば、この議論に現れる事柄に関して「xはFである」という命題の形で判断を行うことがどれほど困難であるかが明らかになると期待されるのである。

このように、従来様々に論じられてきた〈ある〉の意味をどう理解するかという問題は、その把握のために必要とされる「教育」をどう解するかという本稿の主題に関わってくるだけでなく、当該の議論における〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉などの事例は何を意図して挙げられたものなのかという論点にもつながるものとなっている。しかし当該の議論だけから、問題のB1やB3が何を示唆しているのかを具体的に読みとることは難しい。そこでこの問題を検討するために、以下では先行の議論において「教育」に言及されるとき何が示唆されているのかを、当該の議論と突き合わせながら順を追ってたどることにする。それによって、プラトンが当該の議論において示したかったことの一端が浮かび上がってくると考えられるからである。それとともに、「教育」の意味の解釈に付随する以上のような問題も合わせて考察する。

2

『テアイテトス』第一部の先行する議論のうち、「教育」ということに言及するという点でまず注目しなければならないのは 161c-e であるが、それを見るまえに、そこに至るまでの議論の大筋を確認しておく。

第一部では、はじめにテアイテトスの「知は知覚にほかならない」(151e2-3) という第一の定義がプロタゴラスのいわゆる人間尺度説と結びつけられる。尺度説とは次のようなものである。

万物の尺度は人間である、〈ある〉ものについては〈ある〉ということの、〈あらぬ〉ものについては〈あらぬ〉ということの (152a2-4)。

これは次のように言い換えられる。

それぞれのものが私に現れているちょうどその通りに、それらは私にとって〈ある〉、他方それぞれのものが君に現れているちょうどその通りに、それらは君にとって〈ある〉 (152a6-8)。

この「現れている (phainetai)」は「知覚している (aisthanetai)」と置き換えられて (152b12)、次のように定式化される。

各人が知覚しているものは、その通りに各人にとっておそらく〈ある〉 (152c2-3)。

この定式は、知覚が知であるための条件、すなわち、常に〈ある〉に関わる、誤らない、という二つの条件を満たしていることを示唆している (152c5-6)。たとえば、風をある人が冷たいと感ずれば (rigō[i])、その風はその人にとっては冷たいものとして〈ある〉から、その知覚は誤りではなく、したがってそれは知にほかならないことになるのである (cf.152b2-8) ⁽⁴⁾。

さらに、問題の 161c-e の直前でこの定式は「各人に思われていること (to dokoun)、そのことはまた〈ある〉」と言い換えられる (161c2-3)。この場合も〈ある〉は「真である (einai alēthē)」と結びついている (cf.158e5-6)。このように、ここでは「現れている」「知覚している」「思われている」は互換が可能な言葉として用いられ、それらは〈ある〉ということに関わり、その限りで常に誤りがなく真であるから、知でありうると考えられている。

以上が 161c-e に至る議論のおよその流れであるが、次に問題の箇所を引用する。そこではソクラテスが、プロタゴラスの尺度説を次のように批判している。

私は議論の始まりで、すなわち、彼が『真理』という書物を始めるにあたって、万物の尺度はブタである、とか、ヒヒである、とは言わなかったこと、あるいは知覚の能力をもつ何か他のもっと奇妙なものを挙げなかったのを不思議に思う。…それを述べていけばプロタゴラスは、知恵 (sophia) に関してわれわれは彼を神であるかのように驚嘆しているが、実際は知に関してカエルの子のオタマジックシよりも彼のほうが優れている、ということは決してないし、ましてや誰か他の人間と比べた場合は言うまでもない、ということを示すことになったはずなのに。…というのは、もし知覚を通して判断するもの (ho an di'aisthēseōs doxazē[i]) が各人にとって真であり、ある人の知覚経験 (pathos) について別の人のほうが優れた仕方で判別する (diakrinei) とか、ある人の判断 (doxa) が正しいか誤っているかの考察 (episkepsasthai) に関しては別の人のほうが力がある、ということはないのであり、むしろ…各人は自分だけで判断をし (doxasei)、その判断したものはすべて正しく、また真であるのだとしてみよう。その場合、なぜプロタゴラスは知者 (sophos) であり、そのため他の人の教師 (didaskalos) として多額の報酬を得るに値すると見なすのが正しいことになるのか、他方、各人自身が自分の知恵の尺度であるのに、われわれが彼より知恵がなく、彼のもとを訪ねなければならなかったのはなぜなのであろうか (161c3-e3)。

この箇所は、当該の議論 184b-186e と内容がかなり類似している。まず、当該の議論 B 3 では、動物にも知覚の能力はあると言われていたが、ここでも知覚が可能なものとしてブタ、ヒヒ、オタマジックシなどの動物が挙げられている。次に、ここでの「判別」「考

察」などは、当該の議論で用いられている「判別」「考察」という語と実質的に同じ言葉であるが、それらは「知覚を通しての判断」より何か上位の能力として、知覚を通しての判断の正誤、真偽を判定する役割を担っていると考えられているという点も、知覚と思考、考察、判別などを区別する 184b-186e の主張と重なるということができる。そして重要なのは、ここでも判別、考察などの認識能力は知覚とは異なるという論点が、「教える」ということとの関連で述べられているということである。すなわちここでは、プロタゴラスの尺度説の立場に立つと、知覚を通しての判断と、判別・考察の働きとの間の区別がなくなるし、それとともに、プロタゴラスが行っていた教育も意味のないものになる、と批判されているのである。動物にも可能な知覚が知であるのだとすれば、教育を行うための前提である知恵の優劣というものがなくなってしまうからである。この主張は、当該の議論 B3 で、〈ある〉を捉えることができるという点で知覚とは異なる認識能力を獲得するには「教育」が必要と言われていたことと通底していると考えられる。以上のことは、184b-186e で「教育」に言及するとき、ここでふれられているプロタゴラスが行っていた教育が念頭に置かれていたのではないかということ強く示唆するであろう。以下で確認されるように、『テアイテトス』第一部において「教育」ということが取り上げられる際には、とりわけプロタゴラスの主張との連関が視野に入れられているのであり、そのこともこの見方を裏づけてくれると思われる。

ところで先に見たように、この箇所先立って「現れている」は「知覚している」と、さらには「思われている」と置き換えられていたが、引用箇所における「判断する (doxazein)」という動詞は「思われている」と同根の語である。すなわちこの時点では、「現れ」「知覚」「判断」の三者は明確には区別されていない (cf.152c1-2,161e7-162a3)。ここで示唆されているのは、その三者は判別や考察などの働きよりは何か劣ったものだという点である。プロタゴラスの尺度説を受け入れると、そうした働きの違いも無に帰してしまうというのである。

さて、ここでソクラテスが批判しているように、尺度説の立場に立つと、人間と動物の間に知恵の優劣を認めないことにつながるが、そのことは他方、引用でもほのめかされているように、人間と神の間の区別を無視することにも結びつく (cf.162c2-6)。この点に関してソクラテスは直後に、今度は逆にプロタゴラスの立場をおよそ次のように代弁している。すなわち、神々についてそれが〈ある〉か〈あらぬ〉かということは、私〔プロタゴラス〕は書くことから語ることも除いている。また、知恵に関して人間のうち誰をとっても、どんな家畜とも違いは全くないとしたら恐ろしいことだという議論には、いかなる証明も必然性もないのであり、もっともらしさ (eikos) に頼っているだけなのである (162d5-163a1;cf.Diogenes Laertius,IX,51)。

ここではソクラテスはプロタゴラスの立場に立って、神を論点に引き入れることに反対するとともに、知恵に関して人間と動物の間に優劣を認めることにあらためて異を唱えている。しかし続く議論においてソクラテスは、再びプロタゴラスを擁護してはいるのであるが、今度は人間の間には知恵の優劣があることを容認するような発言をしている。「教育」に再び言及されるのはその議論においてであるが、そこでプロタゴラスをはじめとするソフィストが行っていた教育が何を指すものなのかが、もう少し具体的に述べられている。

われわれのうちの各人が〈ある〉ものと〈あらぬ〉ものの尺度であるが、一方に現れているものと他方に現れているものとは違うというまさにその点で、一方は他方と大いに異なっている。そして知恵とか知者が存在しないなどとは私は決して主張しておらず、むしろわれわれのうちの誰かに悪しきものが現れていて、そのため悪しきものがその人には〈ある〉場合には、それを変化させて善きものが現れ、また〈ある〉ようにする人、まさにそういう人を私は知者だと言うのである。…病気の人はこれこれのことを判断するから無知であるが、健康な人はそれとは別のことを判断するから知者である、と非難すべきではなく、むしろ後者へと変化させなければならない。というのは、後者のあり方 (hexis) のほうが優れているからである。このように教育においてもまた、一方のあり方から他方より優れたあり方へと変化させなければならないのであるが、医者には変化させる際に薬を用いるに対して、ソフィストは言論を用いるのである。…そして〔ソフィストは〕魂の悪しきあり方のせいで、魂のあり方と同じ悪しきものを判断している人を、魂の優れたあり方のおかげで優れたものを判断するようにしたのである。…私はこうした知者を決して「カエル」と言ったりはしないのであり、むしろ身体に関しては「医者」と、植物に関しては「農夫」と言うのである。…同じ理由で、ソフィストは教育を受ける人を以上のように導くことができるので知者であり、教育を受けた人にとっては多額の金銭に値するのである。(166d1-167d2)。

ここでは人の身体、教育、植物などに関して、それぞれ医者、ソフィスト、農夫といった専門家が当の分野において知者であることが認められている。ただし、こうした専門家が知者であるのは、専門家が関わる相手のあり方 (hexis) を悪しきものから善きものへと変化させることで、相手の判断の内容、すなわち相手にとっての現れ (ta phantasmata, 167b2-3) を、悪しきものから善きものに変えるという点においてだと言われている。

この箇所をどう理解するかに関しては、解釈が分かれている。一つには、ここでプロタゴラスは人のあり方には優劣があり、それを優れたものにする医者などの専門家の存在を認めることで自分の相対主義を緩めた、と見る立場がある。もう一つは、人のあり方に優劣があるのは、あくまで当人にそう思われる限りにおいてであり、人のあり方を優れたものにする医者やソフィストなどの専門家は、その当人が、その人のおかげで自分のあり方は優れたものになったと思っている点で、その当人にとって専門家であるにすぎない、と解することで、ここでも相対主義は堅持されている、と考えるものである (cf. Burnyeat (1990), 19-28)。いずれにしても、ここではプロタゴラスの相対主義と専門家の存在の両立がはかられているのであるが、「教育」の意味を考えるために重要なのは、この議論では、医者や農夫との類比で、ソフィストは教育において、金銭を受け取って言論によって人のあり方を優れたものにする者と規定されているという点である。すなわちここではプロタゴラスをはじめとするソフィストが金銭との引き換えで人に施していた教育は、人の優れたあり方に関わるものだということが示唆されている。その教育が成り立つためには、ソフィストは文字通り知者でなければならないのである。

先の 161c3-e3 においては、プロタゴラスの尺度説は、知覚を通しての判断と、判別・

考察の働きとの間の区別をなくすることになるし、それとともに、プロタゴラス自身が行っていた教育も意味のないものになる、と批判されていた。それに対してここではソクラテスは、プロタゴラスが人のあり方を優れたものにすると呼んで教育を行っていたことについて、プロタゴラスの相対主義を緩めるか、もしくは専門家の存在と矛盾しないように解釈することで、プロタゴラスの立場を擁護している。このように、ソクラテスのプロタゴラス説に対する態度には二つの箇所の違いがあるが、しかし、どちらもプロタゴラスの相対主義を、彼が行っていた「教育」との関連で捉えており、この 166d1-167d2 において、それは人のあり方を優れたものにするを目標としていたことが明らかにされている。

さて、ソクラテスはこの議論で、いったんプロタゴラスの立場を擁護しているにすぎず、大筋からすれば、プロタゴラスの尺度説は批判されることになる。そのプロタゴラス批判との連関で、「教育」についてのこうした見方を裏打ちしてくれると思われるのが、続く 172c-177c における弁論家と哲学者が対比される議論である。そこではおよそ次のように言われている。要約して引用する。

知恵を愛すること、すなわち哲学に時間をかけて養育された人は、自由に時間の余裕 (scholē) をもって言論を行うが、他方弁論家は、法廷で水時計が促すので、奴隷のように、常にせわしなく (en ascholia[i]) 語る。そのため、弁論家の魂は狭小で正しくないものになって、思考 (dianoia) の健全さもなくなるが、自分では有力者、知者になったと思っている。

哲学者は弁論家と異なり、アゴラへの道や、裁判所や議会などがどこにあるのかなどは知らない。哲学者の思考はこれらすべてを無価値と見なし、むしろ地上では幾何学を、天上では天文学を研究し、あらゆる仕方 で存在するものの全体について、それぞれその本性すべてを探求する。タレスが天文学を研究して上方を眺めていて井戸に落ちたとき、トラキアの侍女が、天上のことを知ろうとはするが、自分の面前や足下のことは気づかない、と冷やかしたが、同じ非難は、哲学にときを過ごしている人すべてにあてはまる。

逆に、哲学者が大衆を上方に引き上げて、正と不正そのものについて、それぞれはいったい何であるか、両者はいかなる点でそれ以外のすべてのものと、また互いに異なっているのか、そして王であることとは、また人間の幸福と不幸とはどのようなものであり、どのようにして幸福を得、不幸を避けるのが人間の本性にはふさわしいのか、への考察 (skepsis) に向かわせると、今度は大衆の方が不慣れのために行き詰り、奴隷育ちではないすべての人の笑いものになる。

善には常に悪がついて回り、悪がこの世界にあるのは必然である。そこで、この世界からかの地へできるだけ早く逃げなければならない。それができる限り神に似ること (homoiōsis theō[i]) であり、思慮 (phronimos) を伴って正しく、敬虔になることにほかならない。悪 (ponēria) を避け、善さ・徳 (aretē) を求めなければならないのは、悪しき人ではなく善き人だと「思われる」ため、などではない。むしろ、神は可能な限り正しいものであり、神に似るにはできるだけ正しくなるほかはないからである。それを知ること (gnōsis) が知恵 (sophia) であり、真の徳である。他方それを知らないこと (agnoia) が無知 (amathia) であり、明白な悪である。

この議論の冒頭（172d6）においてソクラテスは、これで議論の脱線は三度目だと述べている（cf.160e,168c）。また、この議論を終えた後で、以上に述べられたのは付随的なこと（*parerga*）だと言われている（177b8）。それに呼応するかのようには、この議論は『テアイテトス』のなかで積極的な役割を果たしていないと見られることも多かった。すなわち、この議論は『テアイテトス』の本題とは関係がないと考えたり（Ryle,278）、あるいはここで描かれている哲学者像は戯画であると見なす人もいたのである（Waymack,esp.483-484.;Rue）。しかしこのように理解すると、この議論の意義を見失うことになる恐れがあると思われる。

まず、この議論の用語は、『テアイテトス』の他の議論の言葉遣いとよく一致している。すなわちここに現れている「思考（*dianoia*）」（173b1,e3）、「考察（*skepsis*）」（175c2,6）などの言葉は、当該の議論 184b-186e や先に引いた 161c-e で用いられている「思考」「考察」とそれぞれ同根の言葉である。なかでも「正と不正そのものについて、それぞれはいったい何であるか、両者はいかなる点でそれ以外のすべてのものと、また互いに異なっているのかの考察」（175c2-3）という言い方は、当該の議論Aで述べられている〈同〉〈異〉の認識を、素朴な形で先取りしたものと見ることができる。文脈から明らかなように、これらはいずれも弁論家や大衆には欠けていて、それと対比される哲学者に帰属すべき認識のあり方であり、それを働かせることが「知恵（*sophia*）」と結びついている。その「知恵」という言葉は、すでに見た 162d5-163a1 や 166d1-167d2 でも用いられているが、それは『テアイテトス』の冒頭において知（*epistēmē*）と同じものだと言われている（145e1-7）。そうだとするとこの議論の内容は、「知とは何か」を問題にする本篇の主題とまさに重なるものと言うことができる。

また、ここでは言論を時間の余裕をもって取り交わすことが、哲学者の本来のあり方だとされている。そうだとすれば、付随的なこととして述べられたこの議論は、「知とは何か」を追求する本篇の論題とは無関係と見るよりは、むしろ、この議論においてこそプラトンの真意が語られていると考えることもできよう。

さらにこの議論においては、神と人間の違いが前提されている。人間は神に比べれば劣った存在であるからこそ、より優れたものになることが「神に似ること（*homoiōsis theō [i]*）」として捉えられているのである。これに対して、先にも見たように、人間と動物の間に知恵の優劣を認めないプロタゴラスの尺度説は、同時に人間と神の間の区別を無視することにもつながっていた。このようにここでの弁論家批判は、神、人間、動物を類同化する尺度説に対する批判を含意するものにもなっている⁽⁵⁾。以上の点から見れば、この議論は『テアイテトス』の本題と無関係と考えたり、この議論における哲学者像は戯画にすぎないと見るよりは、むしろ用語上も、また内容からしても、『テアイテトス』の本論のなかに組み入れて理解するほうが適切であると考えられるであろう⁽⁶⁾。

さて、本稿の主題である「教育」という点に関しては、この議論のポイントはおよそ次のようにまとめられる。すなわち、世俗的な事柄を無価値と見なす哲学者の、自由に言論をなすという営みには時間の余裕が必要であり（cf.187d10-11）、それが目指すのは「善さ・徳」（176b4）、すなわち人の優れたあり方であって、それは「神に似ること」（176b1）にもつながる。他方、弁論家を含めた大衆には時間の余裕がないために言論のやりとりは奴隷のような仕方になされ、真の意味では野蛮で無教育（*apaidēutos*,174d8）であり、不正

な生を送っている。

ここでは、人の優れたあり方を追求する哲学者の生が時間の余裕と、他方弁論家を含む大衆の不正な生き方が時間の余裕のなさ結びつけられ、後者は無教育と批判されている。時間に余裕がないなかでなされる言論によっては、人は真の意味では教育されたことにはならず、むしろ優れた人になるためには、時間に余裕をもって言論をやりとりしなければならないのである。先に見たように、166d1-167d2 においてソフィストは、教育に関して金銭との引き換えで言論によって人のあり方を優れたものにする専門家とされていた。ここではおそらくそれを受けて、法廷で水時計の促しに応じて (172e1,cf.201a-b) 弁論を行うことに象徴されるような、そうしたせわしないやり方は、人のあり方を優れたものにするためには実際には有効ではないと批判されているのである。このようにこの議論においても、ソフィストが行っていた教育が人の優れたあり方との関連で捉えられ、その内容が疑問視されていると言うことができる。

ところで、これまでの議論において言及されてきた専門家の扱いという点に関しては、直後の 177c-179d も見ておく必要がある。そこではプロタゴラスの尺度説が、再び専門家の存在という観点から批判されているからである。その批判は、先の 166d1-167d2 にはなかった「未来」という論点が導入されているという意味でも、当該の議論 184b-186e を理解するためには重要である。ポイントを抜粋すると、その尺度説批判はおよそ次のようなものである。

誰か素人が、自分は未来に発熱が〈ある〉だろうと思い、他方医者はその思わなかった場合、医者にとってはその人は発熱をしないが、その当人にとっては発熱をするというようなことはない。また未来に〈ある〉だろう酒の旨さ・まずさについて有力なのは、堅琴弾きではなく酒造りをする農夫の判断であり、未来に〈ある〉だろう音の調和・不調和については、体育家ではなく音楽家ほうが優れた仕方で判断をする。料理人が食事の用意をするような場合も同様で、さらに言論に関しては、われわれの各々にとって法廷で説得力が〈ある〉だろうことは、プロタゴラスのほうが素人よりは優れた仕方で事前に判断するのである (prodoxasais)。このように未来の事柄においては、自分が自分にとっての最善の判別者 (aristos kritēs) なのではない。それゆえ、人間のうちには知恵の優劣があり、より知恵のある人が尺度である (178b9-179b5)。

このように、ここでは「未来」の事柄に関して、医者、農夫、音楽家、料理人、さらに自称徳の教師であるプロタゴラス自身を引き合いに出して、プロタゴラスの尺度説が批判されている。すなわち未来における発熱の有無、酒の旨さ・まずさ、音の調和・不調和、言論の説得力などについては、これらの専門家の判断のほうが優れており、その限りで尺度説は成り立たない。ここでは、プロタゴラスのような弁論家も、未来における言論の説得力に関しては専門家であることが認められているのであるが、当該の議論の B 1 と同じく未来に関して〈ある〉を捉えることが問題になっているため、当該の議論 184b-186e との連関がしばしば指摘されている (Cooper,142;Kahn,124;Kanayama,70)。

しかしこの議論の当該の議論との関連を考える際には、両者の間に次のような違いもあることに注意しなければならない。すなわち、まず当該の議論の B 1 は、177c-179d のよ

うに酒の旨さ・まずさ、音の調和・不調和のような特定の領域における善・悪ではなく、端的に〈善〉〈悪〉や〈美〉〈醜〉に言及している。また当該の議論では、177c-179d とは異なり、医者、農夫、音楽家などの専門家には触れていない。さらにそうした端的な〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉の〈ある〉の考察の際に働く「勘案」は、本稿がとくに問題にするB3で「かろうじて長い時間をかけて多くの苦勞と教育を通して、それが備わる人がいるとすれば、その人には備わる」と言われている。この言い方、とくにそのなかの「かろうじて (mogis)」という言葉は、実質的には否定の意味合いが濃い。これらの点は、B1は医者、農夫などの専門家が関与する善・悪とは何か位相が異なる〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉に言及していることを示唆している。では、この〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉は何を含意しているのであろうか。この問題は前節の末尾でも述べたように、本稿の主題であるB3の「教育」の意味を検討するうえで重要な意味をもっている。B3は、B1と同じく「勘案」という語が用いられている点で、B1と強く連関しているからである⁷⁾。

さて、このB1の〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉は何を含意しているのかという問題を考えるために重要なのは、哲学者の生き方がどのようなものかが説明されていた172c-177cの議論である。というのは、同じ「勘案」という語が用いられている点でB1と密接に連関しているB3は、内容と用語の上で172c-177cと強く結びついているからである。そこでは、プロタゴラスを含む弁論家の生き方が、哲学者の生と対比されながら、教育との関連で批判されていた。まず、B3の「長い時間をかけて(en chronō[i])」という言い方は、先の172c-177cにおいて、哲学者の生き方が時間の余裕との関連で語られていたことと重なっている。次に、「苦勞 (pragmata)」という言葉も、172c-177cで哲学者の探求には「苦勞が伴う (pragmat' echei)」(174b6)とされていたのと対応しているのである。補足すれば、161e6-8では「問答という営み (hē tou dialegesthai pragmateia)」が、互いの現れや判断を考察し、吟味しようとする、と規定されている。この「営み (pragmateia)」というのもこの「苦勞」という言葉と同根の語であり、そのことは、哲学者の行う問答という活動は、何らかの苦勞を伴うものであることが含意されていることを示していると思われる。

もし以上の理解が正しく、ここでは「苦勞」ということで哲学者の探求、すなわち長い時間をかけて問答によって互いの現れや判断を考察し、吟味するという営みが考えられているのだとすれば、そうした努力の結果としてかろうじて獲得できるかもしれない勘案の能力に関わるB1の〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉は、哲学者が追求するとされた人の優れたあり方、すなわち徳 (aretē) と関連するものと考えられるであろう。

ここでこれまでの流れを簡単にふり返っておきたい。161c-eでは、プロタゴラスの尺度説は、知覚を通しての判断と、判別・考察の働きとの間の区別をなくするものであり、それとともに、プロタゴラスが行っていた教育も意味のないものになる、と批判されていた。続く166d-167dにおいてソクラテスは、金銭との引き換えで人のあり方を優れたものにする、と称してプロタゴラスが行っていた教育を擁護する際に、専門家の存在を認めていた。172c-177cでは、そのように時間に余裕がないなかでなされる言論によっては、人は真の意味では教育されたことにはならず、むしろ優れた人になるためには、時間に余裕をもって言論をやりとりしなければならないとして、弁論家の生き方が批判されていた。その後の178b-179bでは、見られたように、専門領域における善・悪に関する未来の予言という

観点から、知恵の優劣を認めないプロタゴラスの相対主義が再び批判されている。

このような論の運びからすると、ソクラテスは、医者、音楽家などが固有の領域においては専門家であることは認めているが、プロタゴラスをはじめとする弁論家が教育において本当に専門家なのかという点に関しては疑問を抱いているということがわかる。先に見た 178b9-179b5 の言い方からすると、ソクラテスは未来における言論の説得力という点に限れば、弁論家が専門家、すなわち知者であることを認めている可能性がある。しかし、その弁論家が人のあり方を優れたものにするための教育についても専門家であるということには、はっきりと反対しているのである。すなわちプロタゴラスとソクラテスは、身体の健康・病気や発熱の有無、酒の旨さ・まずさ、音の調和・不調和などについてそれぞれ医者、農夫、音楽家などの専門家・知者の存在を認める点では一致している (cf.171e)。つまりこうした事例においては、専門家と素人の間に知恵の優劣があるということである。しかし他方、人のあり方を優れたものに関わる教育については、ソクラテスは、プロタゴラスをはじめとする弁論家がその専門家であるとは認めていない。172c-177c において示唆されていたように、ソクラテスによれば、優れた人となるためには、時間に余裕があるなかで自由に言論をなすことが必要である。プロタゴラスが金銭と引き換えにして行っていた教育は、そうした目的に合うものではないのである。

『テアイテトス』第一部において当該の議論 184b-186e と同じく人間と動物を対照させながら「教育」がはじめて問題となる 161c-162a は、当該の議論と類似の用語で、同じく動物を引き合いに出してプロタゴラスが標榜している教育を批判していた。もしその議論が、プロタゴラスの相対主義を押し進めると結局どのような立場に行き着くかをまじめに追究したものだとするならば (cf. Burnyeat (1990), 20)、プラトンは第一部の仕上げとも言うべき当該の議論で、プロタゴラスの尺度説に基づく相対主義は最終的には、彼が行っていた教育を無意味なものにするという 161c-162a の論点と、それに続く一連の議論を念頭に置いて、テアイテトスの定義を論駁していると見ることができる。言い換えればこれらの議論に通底しているのは、人間だけでなく動物にも生まれながらにして備わっている知覚は知ではないから、人のあり方を優れたものにするには教育が必要であるが、それは金銭と引き換えになされうるものではない、という考え方である (cf. 201a-b)。こうして、当該の議論の B 3 後半が「長い時間をかけて多くの苦勞と教育」が必要という言い方で端的な〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉の把握に関わる勘案を獲得することの難しさを指摘するとき、その背後には、プロタゴラスが人のあり方を優れたものにすると呼びかけて行っていた教育を批判する意図があると考えられるのである。

3

以上において、『テアイテトス』第一部において「教育」ということに言及されるとき何が問題になっているかを順を追ってたどってきた。これまでの検討を踏まえて、あらためて第 1 節の末尾で述べた問題を考えてみたい。そこでもふれておいたように、Kanayama の Kahn 批判の (2) は、「x は F である」という命題の形で判断を行うこと自体がどれだけ困難であるか、ということに関わっている。もしこれまで述べてきたことが正しければ、第 1 節で見た、Burnyeat や Kahn が前面に出した〈ある〉のコブラ解釈は必ずしも否

定できないのではないかと、と思われる。「xがFである」という命題の形で判断することがどれだけ困難であるかは、Fの内容に応じて変わってくる。たとえばFが人の優れたあり方に関わる、端的な意味での〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉である場合、〈ある〉が命題におけるコプラだとしても、命題の形式で判断することは困難なはずであるし、またそうした判断は単なる知覚とは異なると考えられる。そうだとすると〈ある〉をコプラと解し、知覚には判断の要素は含まれないと考えても、〈ある〉の把握のためには「苦勞と教育」が必要と主張するB3を、以上のように意味ある仕方で解釈することはできるであろう。たとえば、ある人が未来を視野に入れて「xは善である」「xは悪である」という判断を正しい仕方で行うことができれば、その人はその判断にしたがって行為することができる（cf. Burnyeat (1990), 41-42）。そうすれば、その人は徐々に優れた人になっていくことができるのかもしれない。ただ実際はそれが難しいので、B3でその能力の獲得は非常に困難だと言われているのである。

ただし当該箇所 184b-186e はこうした意味での〈美〉〈醜〉〈善〉〈悪〉だけを扱っているわけではない。ここでは色、音、硬・軟などの知覚的性質について、いかにして互いに〈異なる〉あるいは〈反対〉などと識別するのかという問題も取り上げられている。未来の発熱の〈ある〉にも言及する 177c-179d や、また知覚を通じた判断の判別や考察を問題にする 161b-162a についても同様である。おそらくB3は、こうした諸々の事例をすべて含めて、その〈ある〉を把握することがいかに難しいかを指摘しているのである。

そしてそうした色、音、硬・軟などの知覚的性質については、Kanayama の Kahn 批判（2）は妥当する可能性がある。たとえば「硬と軟は反対である」というような判断を行うためにすらB3で述べられているような大変な努力が必要というのは、やや極端な言い方と見られるからである。そうだとするとこの場合、Kanayama の言うように、〈ある〉は事実のあり方、客観性を含意していると解されるのかもしれない。そのことは、当該の議論は、未来の〈ある〉に関して専門家の判断の優位さを指摘する 178b-179b の議論を踏まえたうえで述べられているということにも関連していると思われる（cf. Cooper, 142-144; Kahn, 126）。その際〈ある〉は命題形式の判断を形成するための単なるコプラよりも厳しい意味を含んでいることになるので、〈ある〉を把握できない側の知覚に判断の要素が含まれる可能性は完全には否定できないのである。

最後に、知覚が判断の要素を含むか否かという問題についてのこうした曖昧さについてふれておくと、それは、当該の議論には「判断 (doxa)」という語は現れないことにも関わっている。それは第二部において再び取り上げられて、今度ははっきりと思考と結びつけられることになる。第二部のはじまりで、思考、判断はそれぞれ次のように規定されている。すなわち思考 (dianoia) とは、魂が、自分が考察する (skopein) ものについて、自分で自分相手に (pros autēn) 詳述する (diexerchesthai) 言論のことであり、魂が自分に対して問うたり答えたり、また肯定したり否定したりして対話すること (dialegesthai) である (189e4-190a6)。ここでは思考、判断の双方に、自分相手に語るという契機が導入されており、その限りで両者には通底するものがあると考えられている。

第2節で確認したように『テアイテス』第一部のはじまりでは、判断は知覚に結びつけられていた。大きな流れとしては判断は、未来の〈ある〉に関して専門家の判断の優位

さを指摘する 178b-179b を経て、徐々に思考などの〈ある〉を捉える働きのほうに組み込まれていき、同時に内省的な性格が強まってくると考えられるが、当該の議論はまさにその途上にあり、そこに、当該箇所 184b-186e で知覚は判断の要素、すなわち対象を二項間の関係で把握する能力を含むのか否かという問題に結論を下すことの難しさの一端がある。したがって知覚と判断、さらに思考がどのような関係にあるかを考えるには、第二部も視野に入れながら当該箇所を再検討する必要があるが、それは次の機会に行いたい。はじめに述べたように、本稿の目的は、先行の議論も参照しながら当該の議論 B 3 の「苦勞と教育」という表現、とくに「教育」の意味を読み解くことであった。それは、知覚と判断の関係を考察するための準備作業でもあったのである。

注

(1) 本稿は、拙稿『『テアイテトス』第一部における知覚と判断・序説』、『論集』第 11 号、三重大学人文学部哲学思想学系、教育学部哲学・倫理学教室、2004 年、93-109 頁、の続編である。続編という性格上、論述はその拙稿と重なるところがある。なお『テアイテトス』からの引用は O.C.T. の新版 (1995) によった。

(2) この文章については、teinei を他動詞とする McDowell, 111 の解釈があるが、あまりに技巧的で採用できない。ここの teinei は、184d4 の synteinei とともに、自動詞と見るのが自然である。本文のように訳せば、McDowell の指摘する困難は回避されると思われる。186d3 の ekeinōn も、186c2 の toutōn が同じ行の pathēmata を受けるのと同様に、一行上の tois pathēmasin を受けていると解すべきである。

(3) Cornford, 108 は Cooper に先立って、知覚は対象についての直接的な気づき (immediate awareness) だと考えていた。

(4) この定式はさらにヘラクレイトス流の万物流転説にもとづく知覚論として展開される (152d ff.)。テアイテトス流の知覚論は、知覚の成立を知覚主体と知覚対象の間の運動によって説明しようとするものである。それがプロタゴラスの尺度説とどのような関係にあるのかについても、ヘラクレイトス流の知覚論はプロタゴラスの尺度説の立場をより明確にしている (McDowell, 121-122; Bostock, 44; Burnyeat (1990), 12; Day, 54-55)、前者は後者を支えている (Silverman, 109-122) など様々な見方があるが、ここでは詳論できない。

(5) この箇所に関連してしばしば指摘されるように、『法律』(716c4-d1) では「万物の尺度は何よりも神であり、…神に愛されようとする者は、できる限りそれに似たものにならなければならない」と言われている。ただし Armstrong は、『法律』など後期の著作では、「神に似ること」の力点は、この世界から逃れることより、この世界のあり方を改善することに置かれていると主張している。

(6) Sedley (2004), 65 ff. は、この議論の本篇における意義を積極的に評価しようとしている。本篇末尾に描かれているソクラテスの様子と結びつける点などは興味深い。他方、しばしば『国家』『ティマイオス』など他の対話篇の議論を援用している。それに対して以上の理解は、あくまで『テアイテトス』内部の議論の流れとの連関で、この議論の重要性を読み解こうとするものである。この点は、Annas, 52-71; Sedley (1999) なども参照。

(7) この「勘案」という語はプラトンにおいて用例が少なく、その正確な意味を読みとることは難しい。Campbell, 164 は、「ロゴスによって何らかの形・種 (eidos) に遡及させ

ること」と注記している。内容的に類似の用例としては『プロタゴラス』332d1、『国家』441c1を参照。

文献表

- Annas, J. (1999), *Platonic Ethics, Old and New*, New York.
- Armstrong, J.M., (2004), "After the Ascent: Plato on Becoming Like God", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 26, pp.171-183.
- Bostock, D. (1988), *Plato's Theaetetus*, Oxford.
- Burnyeat, M.F. (1976), "Plato on Grammar of Perceiving", *Classical Quarterly* N.S. 26, pp.29-51.
- (1990), *The Theaetetus of Plato*, with a Translation of Plato's *Theaetetus* by M.J. Levett, Indianapolis.
- Campbell, L. (1883), *The Theaetetus of Plato*, 2nd ed., Oxford.
- Cooper, J.M. (1970), "Plato on Sense-Perception and Knowledge (*Theaetetus* 184-6)", *Phronesis* 15, pp.123-146.
- Cornford, F.M. (1935), *Plato's Theory of Knowledge*, London.
- Day, J.M. (1997), "The Theory of Perception in Plato's *Theaetetus* 152-183", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 15, pp.51-80.
- Kahn, C. (1981), "Some Philosophical Use of "to be" in Plato", *Phronesis* 26, pp.105-134.
- Kanayama, Y. (1987), "Perceiving, Considering, and Attaining Being (*Theaetetus* 184-186)", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 5, pp.29-81.
- McDowell, J. (1973), *Plato Theaetetus*, Oxford.
- Modrak, D.K. (1981), "Perception and Judgement in the *Theaetetus*", *Phronesis* 26, 1981, pp.35-54.
- Rue, R. (1993), "The Philosopher in Flight: The Digression (172c-177c) in Plato's *Theaetetus*", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 11, pp.71-100.
- Ryle, G. (1966), *Plato's Progress*, Cambridge.
- Sedley, D. (1999), "The Ideal of Goodlikeness", in Fine, G. (ed.), *Plato 2, Ethics, Politics, Religion, and the Soul*, Oxford, pp.309-328.
- (2004), *The Midwife of Platonism: Text and Subtext in Plato's Theaetetus*, Oxford.
- Silverman, A. (2000), "Flux and Language in the *Theaetetus*", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 18, pp.109-152.
- Waymack (1985), M.H., "The *Theaetetus* 172c-177c: A Reading of the Philosopher in Court", *The Southern Journal of Philosophy* 23, pp.481-489.